

# 西沢遺跡ほか

山王遺跡 第 181 次 調査

山王遺跡 第 186 次 調査

西沢遺跡 第 30 次 調査

平成 30 年 3 月

多賀城市教育委員会

## 序 文

多賀城市内には、特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、それらは市域の約4分の1に及んでおります。貴重な文化財を後世に伝えていくことは私たちの責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りながら、国民共有の財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成29年度に受託事業として実施した3件の発掘調査成果を収録したものです。多賀城跡の東側に位置する西沢遺跡では、多賀城と密接に関わるとみられる古代の堅穴住居跡や、中世の屋敷跡の調査を実施し、多賀城跡に隣接した丘陵上における、古代から中世にかけての様子を明らかにできたことは、本遺跡のありかたを知る上で貴重な成果ということができます。

広大な遺跡範囲に対し調査面積はごくわずかですが、これら一つひとつの成果を積み重ねていくことが、当市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

結びになりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ、関係各位に対し心から感謝を申し上げます。

平成30年3月

多賀城市教育委員会

教育長 小畠 幸彦

## 例　　言

- 1 本書は、受託事業による平成29年度に実施した発掘調査3件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数值における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。また、遺物観察表における数値の単位はcmである。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原: 1996) を参考にした。
- 6 执筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は村松稔・小原駿平・早坂優子が担当した。本書の編集は村松稔が行った。  
I・III: 村松稔 II: 崑山未津留 IV: 崑山未津留・武田健市
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	山王遺跡第181次調査	3
III	山王遺跡第186次調査	8
IV	西沢遺跡第30次調査	15

## 調　　査　　要　　項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 小畠幸彦
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋秀徳
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
主幹 武田健市 副主幹 村松稔 研究員 石川俊英 熊谷満  
技師 崑山未津留 小原駿平 調査員 茂泉光雄
- 4 調査協力者 児玉正一 株式会社アーネストワン 有限会社インテム
- 5 調査従事者 相沢義雄 渥美静香 阿部純一 阿部信夫 石徹白和人 上村博 宇津志清明  
大泉清吉 大友文夫 小川勝彦 糸川良谷 加藤義宏 工藤敦子 工藤正好  
小松まり 西条金三 斎藤義治 櫻井良博 佐々木直正 佐々木正範 佐藤衛  
鈴木哲 瀬戸口弘行 戸枝瑞恵 中込弘美 中島弘 梨本八千代 濱田茂樹  
平塚訓章 平塚孝志 藤田恵子古瀬律子 星芳子 三浦侑士 村上喜代中  
村田文雄 横山和雄 渡邊慶樹
- 6 整理従事者 阿部麻衣子 内海美由紀 加藤京子 川名直子 佐藤ゆかり 滝野とし子  
千葉都美 千葉貴久江 堀川紀子 宮城ひとみ 村上和恵

### 調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	山王遺跡第181次	南宮字町4-2番2・4-2番3	平成29年4月11日～4月28日	50m <sup>2</sup>	嵐山
2	山王遺跡第186次	山王字山王四区1-6-8番3	平成29年5月29日～6月1日	40m <sup>2</sup>	村松
3	西沢遺跡第30次	西沢7-4番1外1-5筆	平成29年8月21日～12月22日	4850m <sup>2</sup>	熊谷 嵐山

## 凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S B : 据立柱建物跡 S I : 穴住居跡 S D : 溝跡 S K : 土壙  
Pit : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。
  - (1) 土師器坏

A類 : ロクロ調整を行わないもの  
B類 : ロクロ調整を行ったもの

B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの  
B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの  
B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの  
B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの  
B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する
  - (2) 土師器甕

A類 : ロクロ調整を行わないもの  
B類 : ロクロ調整を行ったもの
  - (3) 須恵器坏

I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの  
II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの  
III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの  
IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの  
V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した藤原国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究逐年報1997』1998)と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郡桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・塙原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

## I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

### 山王遺跡

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

### 西沢遺跡

西沢遺跡は当市北東部の市川・浮島地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部にあたり、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約6mである。遺跡全体をみると北から南に向かって低くなる緩斜面の合間に、大小の沢地形が複雑に入り組んだ景観を呈している。今回実施した調査区は遺跡のおよそ中央にあたり、北側は標高約35m、南側は標高約30mで、比高差約5mの緩斜面上に位置している。

本遺跡内ではこれまで29度に及ぶ発掘調査を実施しており、平安時代の数多くの遺構や遺物を発見している。主な成果をみると、第2次調査区では一辺8mを超える平安時代の堅穴住居跡や桁行5間の大型掘立柱建物跡、倉庫とみられる総柱の掘立柱建物跡を確認している。また、第3次調査区では、東側の沢地形に近接して、平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房跡が営まれていたことが明らかとなっている。これらは、遺構の規模や性格などから、いずれも西側に隣接する多賀城との関連性が想定できるであろう。

一方、第2次調査区では中世の整然と配置された30棟を超す掘立柱建物跡群を確認しており、立地も含めて沖積地で確認されている大規模な屋敷群との構造的な違いにも注目される。

1：山王道跡第181次調查 2：山王道跡第186次調查 3：西沢道跡第30次調査



## II 山王遺跡第181次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年11月に、地権者より山王遺跡の北西部に位置する当該地での共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に直径0.6～0.8m、深さ8mのパイプを計34本設置することから、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で収まる在来工法への変更を協議したが、在来工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工すると結論に至った。平成29年2月24日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、3月6日より25日まで確認調査を実施した。その結果、遺構が確認されたことから、4月7日に調査依頼者と委託契約を取り交わし、4月11日より本発掘調査に着手した。

4月11日、確認調査面の東側と南側を重機で2m拡幅し、崩落防止のため掘削法面の成形を行った。12日、現場事務所を設営し、遺構検出作業に着手した。17日、測量既知点より水準測量を行い、調査区内に測量基準点を設定した。19日から21日に平面図と断面図を作成し、調査区の全景写真を撮影した。24日、下層の遺構の有無を確認するため調査区内に2本のトレーナーを設定し、層位ごとに掘り下げたが、遺構は確認できなかった。26日、現場の撤収作業を行い、28日の調査区の埋戻しをもって現地調査的一切を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 層序

今回の調査では、現在の表土以下9層の堆積を確認した。

I<sub>1</sub>層： 現代の盛土層で、厚さは90cmである。

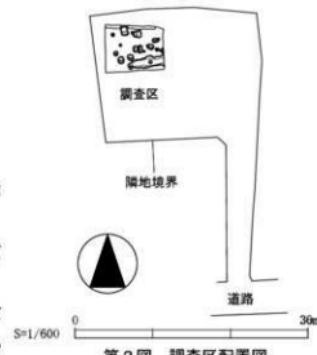
I<sub>2</sub>層： 旧表土で、厚さ40cmである。全体に微量の炭化物を含む堆積層である。

II 層： 暗褐色土で、厚さ20～40cmである。ほぼ均質で古代の土器片を含む。

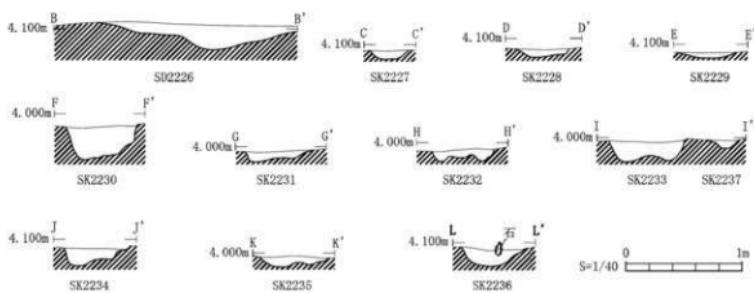
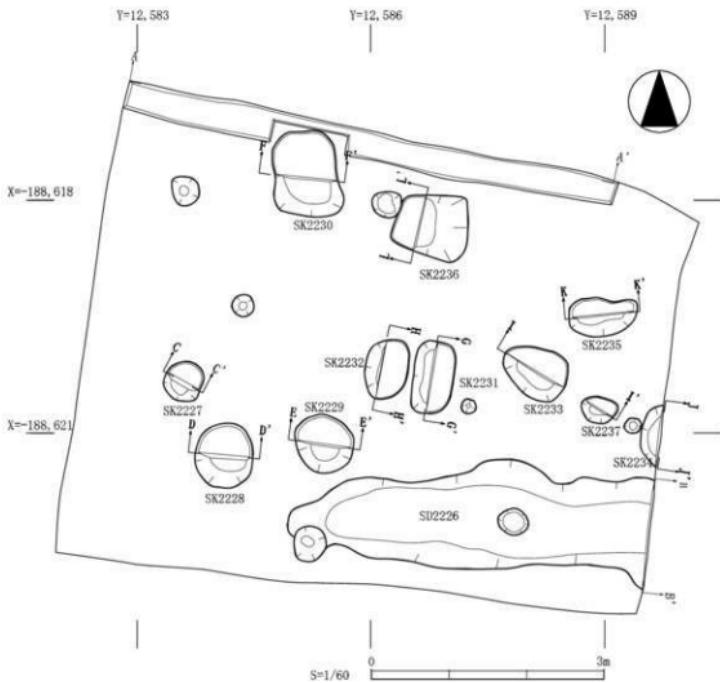
III 層： 黄褐色の細砂で、厚さ10～30cmである。ほぼ均質だが粘質土の部分もある。本地区周辺部の基盤層で、本調査の遺構検出面である。



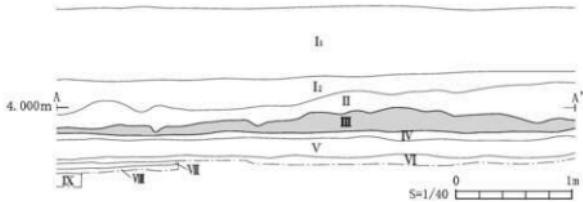
第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 IV層上面造構平面図・断面図



第4図 調査区北壁断面図

- IV 層： 黄灰色粘質土で、厚さは8cm前後である。薄く平坦に堆積し、乱れない。
- V 層： 黄褐色の細砂で、厚さは20cmである。植物遺体を多く含んでいる。
- VI 層： 灰色粘質土で、厚さは5cmである。薄く平坦に堆積し、乱れない。
- VII 層： 黄褐色粘質土で、厚さは4cmである。
- VIII 層： 灰色粘質土で、厚さは5cmである。
- IX 層： 灰オリーブ色砂質土で、厚さは10cm以上である。

## (2) 発見遺構

今回の調査では、III層上面でピットと土壤を検出した。

### S D 2226 溝跡（第3・4図）

【位置・形態】調査区南側で確認した溝跡である。東で調査区外へ延びるため全容は不明である。遺構の上面が搅乱により失われているが、延長線上の西側壁面で断面が観察されることから、本来は西側に延びると考えられる。

【重複】2基のピットと重複し、それよりも古い。

【方向・規模】ほぼ東西方向の構で、傾きはない。規模は4.6m以上で、上端は最も幅広い部分で1.4mである。長軸が70cm、短軸が50cm、深さは15cmである。壁はゆるやかな傾斜で、明確な立ち上がりはない。底面はゆるやかな起伏を繰り返す。

【埋土】にぶい黄褐色の細砂である。灰色細砂を混入するため色調は斑状を呈する。東側では基盤層に由来するブロックを混入している。

【遺物】土師器甕（A類）、須恵器甕の破片が出土している。

### 土壤群（第3・4図）

今回の調査では複数の土壤を確認している。規模は長軸で1m前後、短軸で60cm前後の不整長方形、または同規模の不整梢円形のものがほとんどである。深さは10cm前後のものが多く占めているが、これは搅乱によって遺構の上層面が失われているためと考えられる。埋土もほぼ同様で、にぶい黄褐色の細砂で、灰色の細砂を混入するため色調は斑状を呈している。出土遺物は断片資料で土師器甕（B類）、土師器甕（A類）、須恵器甕、須恵器甕が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、Ⅲ層でビットと土壌を発見した。しかし、検出面の直上に及ぶ搅乱により、Ⅱ層のほぼ全面とⅢ層上面が失われており、遺構の残存状況が極めて悪い。発見された遺構も、Ⅱ層で検出されるものが含まれる可能性がある。また、出土資料も断片に限られるため、正確な遺構年代の特定は難しい。そのため、年代については東側隣接地で実施された第100次調査（平成24年）の成果を参考に推定したい。

第100次調査では基盤層の直上に堆積するIV層上面で北1東西道路跡（S X 1408）が発見されている。道路側溝の新旧関係からA～Cの3時期の変遷があり、その中のB期の南側溝（S D 1370）の埋土中に灰白色火山灰粒が混入することから、10世紀前葉以降の年代が与えられている。これらの遺構を検出した第100次調査のIV層（褐色土）と本調査のⅡ層（暗褐色細砂）を比較すると、それぞれが基盤層の直上に堆積する点や、標高・土質ともに類似性があることから、同一層位であると考えらる。本調査で確認した遺構は層位的にこれらよりも古い基盤層上面（本調査のⅢ層）で確認していることから、遺構年代の下限を灰白色火山灰が降下する10世紀前葉以前と考えられる。また、出土遺物には古墳時代の遺物が含まれず、断片資料ではあるものの8世紀代の特徴を示す土師器片が含まれていることから、本調査の遺構の年代についてはおよそ10世紀前葉以前の平安時代と推定される。

### 参考文献

- (1) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成24年度ほか発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第111集 2013



遺構検出状況（東より）



完掘状況（東より）

写真図版 1

### III 山王遺跡第186次調査

#### 1. 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における建売住宅建設に伴う本発掘調査である。平成29年3月7日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、直径50cm、長さ2.0mの杭状改良を33本打ち込むものであった。当該地の北側隣接地では、平成26年度に宅地造成計画による道路及び擁壁基礎部分の発掘調査（第142次調査）を実施している。その結果、現地表から1.3m下で平安時代の道路跡をはじめ多くの遺構や遺物を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。

このため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないとのことから、宮城県文化財保護課の指示により当該地の遺跡の状況を確認するための確認調査を実施することになった。4月4日、地権者から発掘調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、12日より確認調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土の除去から取りかかったところ、現地表から約1.2m下で、SD2462などの古代の遺構を発見した。13日には作業員を動員し、遺構発見作業を行うとともに、発見した溝跡などの深さを探るために調査区の西側を深く掘り下げた。あわせて下層での遺構の有無を確認するため南側で深堀りを行ったところ、IV層の下で黒色粘土は確認したものの、畦畔などの遺構は確認できなかった。19日には写真撮影を行い、確認調査を終了した。

その後5月29日に本発掘調査の委託契約を締結し、5月30日から調査を実施した。はじめに調査区内にたまつた雨水の排水を行ったのち、検出していたSD2462から埋土の除去を開始した。基準点を移設し、図面作成を開始するとともに、調査区全景写真の撮影を行った。6月1日にSD2462とSX2463との接続関係を調べるために埋土の堆積状況を断面で確認した後、埋戻しを行い現地調査を終了した。

#### 2. 調査成果

##### (1) 層序（第2図）

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。

I層：現代の盛土（I1層）と水田耕作土（I2層）である。厚さはI1層が約0.9～1.2m、I2層が12～18cmである。



第1図 調査区位置図

II層：すべての遺構を覆っており、灰白色火山灰を部分的に含む黒色粘質土で厚さは9～14cmである。

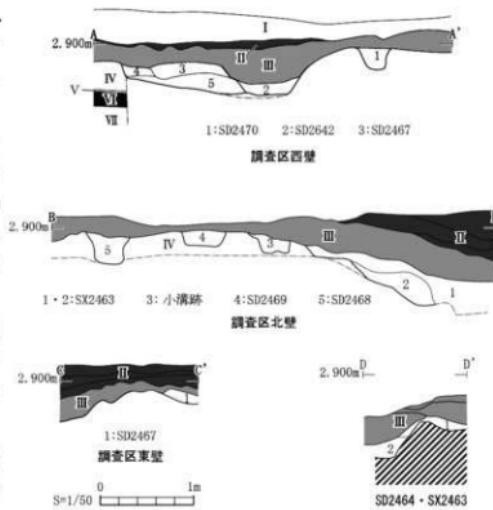
III層：すべての古代の遺構を覆っており、S D2642の最上層となっている。灰白色火山灰と灰黄色砂を含む黄灰色粘質土で厚さは9～27cmである。

IV層：古代の基盤層である。黄褐色粘土と黒褐色・オリーブ褐色砂の互層で厚さは27～58cmである。

V層：黄褐色粘質土と黄灰色粘質土が1～2cmずつ互層に堆積し、厚さは5～6cmである。後述する古墳時代の水田層（VII層）が廃絶した後に堆積した自然堆積層とみられる。

VI層：古墳時代前期の水田耕作土層とみられる。黒色粘土で厚さは7～21cmである。

VII層：黄褐色砂である。



第2図 S D2642・S X2463断面図

## (2) 発見した主な遺構と遺物 (第2・3図)

### S D2462溝跡・S X2463落ち込み

【位置・形態】調査区のほぼ中央で発見した東西方向の溝跡とそれに接続する深い落ち込みである。

【重複】S D2467、S K2465・2466、S X2474・2475及び小溝跡と重複しており、これより新しい。

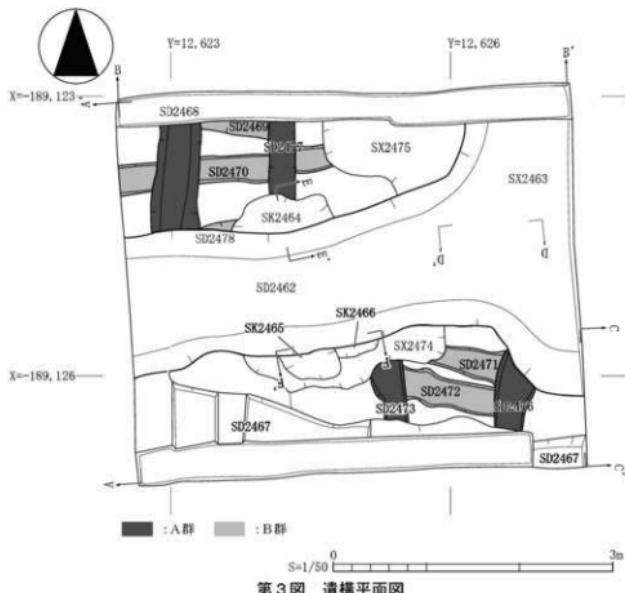
【規模】S D2462の規模は東西3.7m以上、幅1.5m、深さ38cm、S X2463は南北3.4m以上、東西1.3m以上、深さ88cm以上である。

【埋土】3層確認した。1層は堆積層のⅢ層、2層はⅣ層に起因する土を斑状に少量含む暗黄灰色粘土、3層はⅣ層に起因する土を筋状に含む黄灰色粘土である。

【遺物】土師器壺(B V類)・甕(B類)、須恵器壺(V類)・甕・瓶、須恵系土器壺、丸瓦、平瓦が出土している(第4図)。



S D 2467 溝跡出土 土師器壺 (R1)



第3図 遺構平面図

#### S D2467溝跡

【位置・形態】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】S D2462・2473・2476と重複しており、これらより古い。

【規模】長さ4.9m以上、幅1.0m以上、深さ32cmである。

【埋土】3層確認した。1層は灰白色火山灰と黒色土を斑状に含む暗黄灰色粘土、2層と3層はIV層に起因する土を斑状に含む暗黄灰色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### 小溝跡群

【位置】調査区の全域で確認した東西南北の小溝跡である。

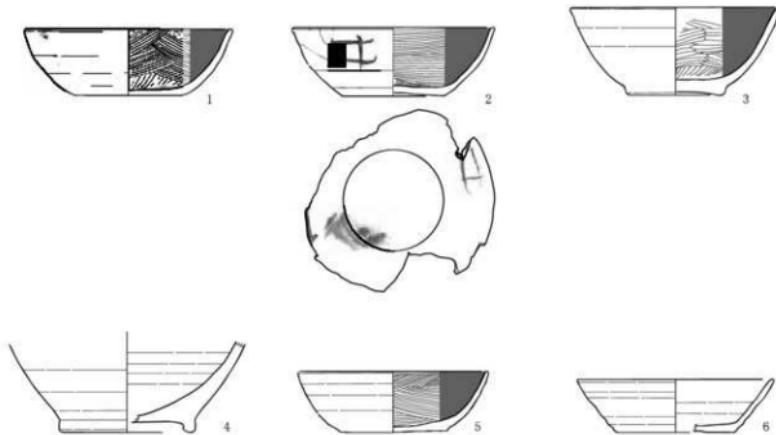
【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から、新しい順にA群のS D2468・2473・2476・2477、B群のS D2469～2472・2478に分けられる。方向はA群が南北方向、B群が東西方向である。

【重複】S D2462・S X2463、S D2467、S K2464、S X2474・2475と重複しており、これらより古い。

【規模】S D2468でみると、長さ1.5m以上、幅43～51cm、深さ34cmである。

【埋土】IV層に起因する土を斑状に含む暗黄灰色粘土である。

【遺物】B群のS D2470から須恵器坏（III類）が出土している（第4図）。



S=1/3 0 10cm (単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 坏	SX2463 1層	ロクロナデ、油焼 底部: 回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理 沿縁	(13.3) 20/24	7.0 24/24	4.25	I-1	R1	BV類
2	土師器 坏	SX2463 1層	ロクロナデ、油焼 底部: 回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(12.8) 4/24	6.5 24/24	4.4	-	R2	BV類 墨書き
3	土師器 坏	SX2463 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 5/24	(6.2) 13/24	5.6	-	R3	BV類
4	須恵器 底	SD2462 1層	ロクロナデ、高台貼付 →ロクロナデ	ロクロナデ	— 0/24	(8.6) 9/24	—	-	R5	
5	土師器 坏	SX2475 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(12.1) 7/24	6.8 24/24	3.9	-	R4	BV類
6	須恵器 坏	SD2470 1層	ロクロナデ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ	(12.4) 8/24	(7.6) 9/24	3.4	-	R6	III類

第4図 SD2462・SX2463、SX2475、SD2470 出土遺物

#### SK 2464 土壌

【位置】調査区北側で発見した。

【重複】SD 2462・2477・2478と重複しており、SD 2477・2478より新しく、SD 2462より古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北43cm以上、東西1.1m以上、深さ36cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層確認し、いずれも黄灰色粘土である。斑状のIV層に起因する土を、1層は少量含んでいる一方、2層は多量に含んでいる。

【遺物】土師器坏（B類）・甕（B類）、須恵器坏が出土している。

### S K 2465 土壌

【位置】調査区南側で発見した。

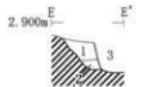
【重複】S D 2462、S K 2466、S X 2474と重複しており、S K 2466、S X 2474より新しく、S D 2462より古い。

【平面形・規模】平面形はS D 2462に纏められ不明である。規模は南北34cm以上、東西65cm以上、深さ7cmである。

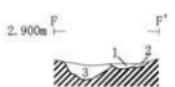
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層確認した。1層は黒褐色粘土で、2層はIV層に起因する土を斑状に多量に含む黒褐色粘土である。

【遺物】須恵器甕が出土している。



1・2:SK2464 3:SK2462



1・2:SK2465 3:SK2466

S=1/50 0 1m

第5図 S K 2464～2466 土壌断面図

### S K 2466 土壌

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】S D 2462、S K 2465、S X 2474と重複しており、S X 2474より新しく、S D 2462、S K 2465より古い。

【平面形・規模】平面形はS D 2462に纏められ不明である。規模は南北14cm以上、東西50cm以上、深さ20cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】1層確認し、IV層に起因する土を斑状に含む黄灰色粘土である。

【遺物】出土していない。

### S X 2474

【位置】調査区南側で発見した落ち込みである。

【重複】S D 2471・2473、S D 2462と重複しており、S D 2471・73より新しく、S X 2463より古い。

【平面形・規模】平面形はS D 2462・S X 2463に纏められ不明である。規模は南北56cm以上、東西2.2m以上、深さ20cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【遺物】出土していない。

### S X 2475

【位置】調査区北側で発見した。

【重複】S D 2462・S X 2463、S D 2470と重複しており、S D 2470より新しく、S D 2462・S X 2463より古い。

【平面形・規模】平面形はS D 2462・S X 2463に纏められ不明である。規模は南北82cm以上、東西1.6m以上である。

【遺物】土師器壺（B類）が出土している（第4図）。

### 3.まとめ

今回の調査では、方格地割のうち西7道路の西側の区画にあたる山王四区内で調査を行い、IV層上面で遺構を発見した。遺構の重複関係を整理し、図示すると第6図になる。

はじめに10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰との層位的関係から年代を考える。この火山灰はSD 2467の1層に斑状に含まれていることが確認でき、2次堆積と考えられることから、SD 2467とSD 2462・SX 2463は10世紀前葉以降である。これ以外の遺構は、灰白色火山が確認できないことから、それ以前と考えられる。

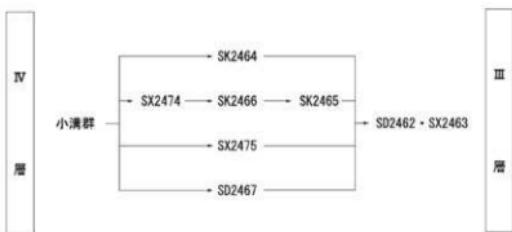
次にSD 2462・SX 2463から出土した遺物については、土師器壺（B V類）・甕（B類）、須恵器壺（V類）・甕・瓶、須恵系土器壺、丸瓦、平瓦が出土している（第4図1～4）。須恵系土器については、出土した量も少なく、すべて破片であるため図化できたものはない。図化できた3点の土師器壺（第4図1～3）の底径／口径比は0.32、0.34、0.47である。全てB V類であり、また内面底部のヘラミガキは放射状である。これら土師器壺と、9世紀後半に位置付けられる多賀城跡鴻の池第10層出土土器群と比較すると、鴻の池第10層出土土器は0.37～0.54の間に分布していることに比べ、SD 2462・SX 2463のものが値が小さいことが指摘できる。このことから、SD 2462・SX 2463の出土土師器壺は、多賀城跡鴻の池第10層出土土器群より新しい要素がみられ、灰白色火山灰との関係も矛盾しない。一方で、高崎遺跡SX 1080土器捨て場跡第2層は、灰白色火山灰の直上にあたり、出土した土師器壺の底径／口径比は、0.30～0.46である。SD 2462・SX 2463と比べるとほぼ同じであるが、高崎遺跡SX 1080土器捨て場跡第2層出土土器群は、須恵系土器が約6割を占めるているのに対し、SD 2462・SX 2463からは須恵系土器が破片のみで、その量も少量しか出土していない。高崎遺跡SX 1080土器捨て場跡は万燈会のような仏教儀式に使われた土器が投棄されたものと推定されており、須恵系土器の出土量の差が、出土土器群の性格や場の使われ方の違いによるもの可能性がある。以上のことから、SD 2462・SX 2463の年代は灰白色火山灰との関係から10世紀前葉頃を上限としつつ、これをさほど降らない年代と推定しておきたい。

SD 2462・SX 2463以外の遺構は出土遺物が少ないため、詳細は不明であるが、土師器（A類）が出土していないことや、灰白色火山灰の降下以前にあたることから、およそ9世紀代と考えておきたい。

#### 【引用・参考文献】

多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第11次調査－調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第37集 1995

宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1992』1993



第6図 遺構変遷模式図



調査区全景（北西から）



S D2462溝跡・S X2463落ち込み接続部断面（北西から）

写真図版 1

## IV 西沢遺跡第30次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本件は、浮島字西沢地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成28年3月10日に、地権者より西沢遺跡の西部に位置する当該地での宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、区域面積18,256.03m<sup>2</sup>で最大1.7mの切土および最大8.8mの盛土を施し、55区画の宅地を造成するものである。当該地の一部では第2次調査（平成6年）を実施しており、古代から中世にかけての遺構を多数発見している。開発が遺跡に影響を及ぼすことが避けられないことから、平成29年1月から3月に確認調査を実施し、本発掘調査に要する期間や予算を算定した。これらの計画について事業者との合意に至ったことから、平成29年7月4日に事業者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、8月1日より本発掘調査に着手した。



第1図 調査区位置図

本調査は調査面積が広いため、西区・南区・東1～4区に分けて調査を進めた（第2図）。重機による表土除去は西区から東区、南区の順に行った。重機が次の区画に移動した後、追いかける形で各区の精査に着手した。

8月22日、現地事務所および安全施設の設営を行い、重機による表土掘削に着手した。8月22日～27日に西区、8月28日～8月30日に南区、8月31日～9月20日に東区の表土除去を行った。9月21日までに調査区全体の事前調査を終了し、西区より精査に着手した。

9月27日、第2次調査で発見され、埋め戻されていたS B 606掘立柱建物跡を検出した。10月3日、遺構の少なかった西部全域の精査を終了、ドローンによる空撮を行った。

10月12日より東区の調査に移行し、標高の高い北側の東1区より、2区、3区、4区の順で精査を進めた。東区には多くの切り株があり発掘作業が難航した。10月13日、東1区で東西方向の中世の土塁S X 576と、北側に隣接するSD 575区画溝を確認した。東1区・東2区の精査は10月31日で終了し、11月8日より東3区の精査に着手した。3区では中世の区画溝が多く、SD 587・589・595およびSD 598に伴うS X 598、S X 600土塁を確認した。11月15日にはS X 598水溜施設から茶白や天目茶碗が出土し、これらの区画溝が中世の遺構である確証を得た。11月17日より東4区の精査に着手し、SD 602区画溝を確認している。12月1日、空撮を行い、東区全体の精査を終了した。

12月6日より最後の区画である南区の精査に着手した。12月8日、調査区を縦断するSD 603・604区画溝を確認した。これらの溝は規模が大きく、人力での完掘が困難なため、トレンチによる調査とした。また、発掘作業に並行して、現場の撤収作業も開始した。12月14日、新たに大型の竪穴住居跡であるS

I 607 壁穴住居跡を検出した。12月22日、S I 607の精査終了後、調査区全体の空撮をもって発掘作業の全てを終了した。

## 2. 調査成果

### (1) 層序

調査区のほぼ全域で、以下の層序が確認できる。

I層：表土で、厚さは10～30cmである。砥石、羽口、青磁碗、天目茶碗、近世陶磁器等が出土している。

II層：調査区全域の基盤層で黄褐色土・黄褐色粘質土(10YR5/8)である。本調査の古代・中世の遺構検出面ある。西区および東区の一部では同色の岩盤層も見られる。東3調査区のS X 598 水溜施設の壁面では、深さ1.8mまで続くことが確認できる。

### (2) 発見遺構

本調査では調査区を西区・南区・東1～4区に分けて設定した(第2図)。また、全ての遺構をII層上面で確認した。以下、各調査区ごとに主要な遺構について概要を記す。

#### 【南区検出遺構】

##### S B 606 挖立柱建物跡(第3・4図)

南区の北西で検出した建物跡で、第2次調査で検出したSD 164 挖立柱建物である。桁行4間、梁行2間の東西棟建物跡であり、東側に1間分の廊が取り付くことが報告されている。なお、P 14(第2次調査P 5)については、前回調査後の搅乱によって壊されており、検出には至らなかった。

【位置】南区の北西、X=-187,902～-187,910、Y=14,065～14,077で確認した。遺構は緩やかな斜面上にあり、北側が高く、南側が低い。標高値は29～29.5mである。

【桁行・梁行】桁行4間、梁行2間の東西棟建物跡であり、東側に1間分の廊が取付く。

【柱痕跡】柱穴は13基(P 1～13)を検出し、全ての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】P 5でSB 198(第2次調査検出)の柱穴と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は身舎南側柱列で測ると、東で10度南に偏している。建物の規模は規模は規模は身舎南側柱列で測ると総長12.24m、柱間は西から2.64m、2.40m、2.40m、2.40m、2.40mである。梁行は東側柱列で4.16mであり、柱間は北から2.1m、2.06mである。

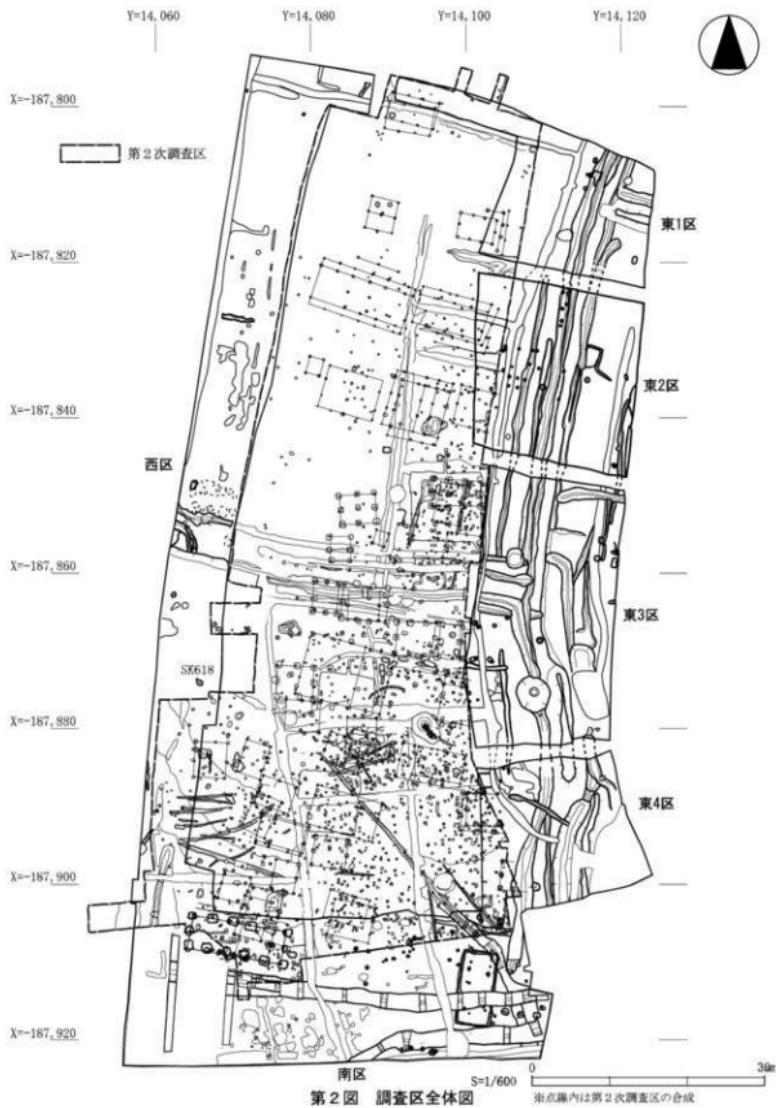
【掘方】平面形は隅丸方形状を基調とする。規模はもっとも大規模な北側柱列東より3間目柱穴(P 13)で測ると長径1.5m、短径1.1m、深さ70cmである。埋土は黄褐色土(10YR5/6)や褐色土(10YR4/4)が主体で、黒褐色土(10YR3/2)の小プロック状が多く混入し、斑状を呈する。

【柱痕跡】直径24～28cmの円形である。埋土は黒褐色土(10YR3/2)が主体であり、褐色土(10YR4/4)や炭化物粒を僅かに混入する。

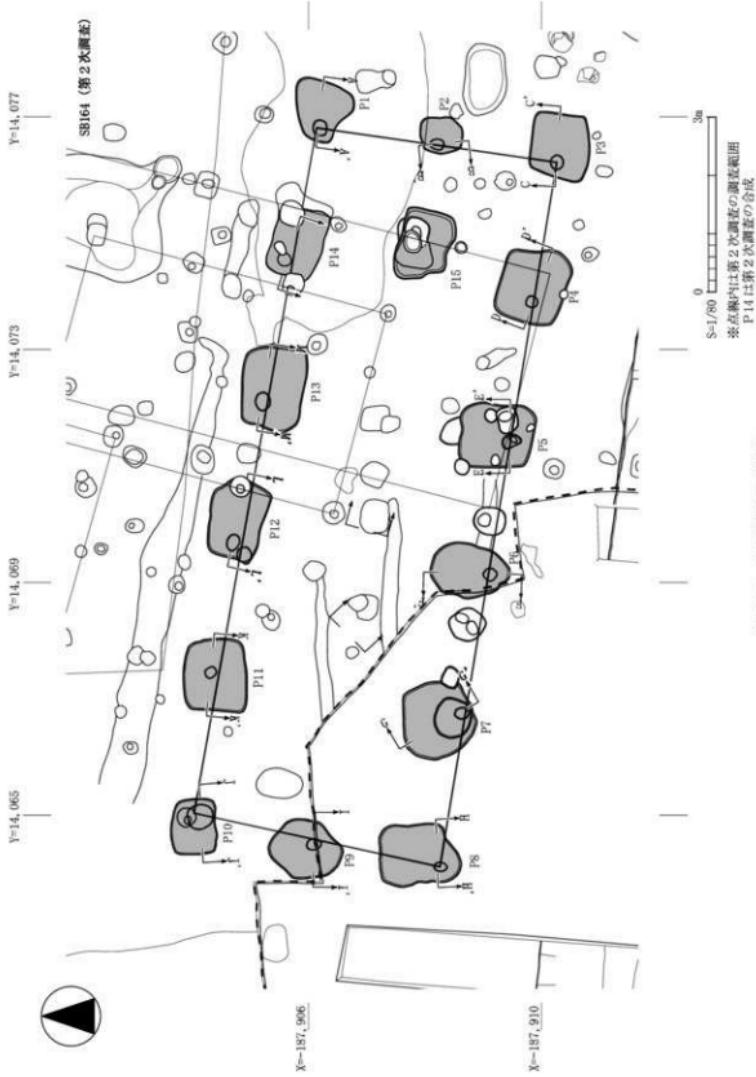
【遺物】土師器壊(B類)、土師器甕(B類)、須恵器甕が出土している。

##### S B 608 挖立柱建物跡(第5図)

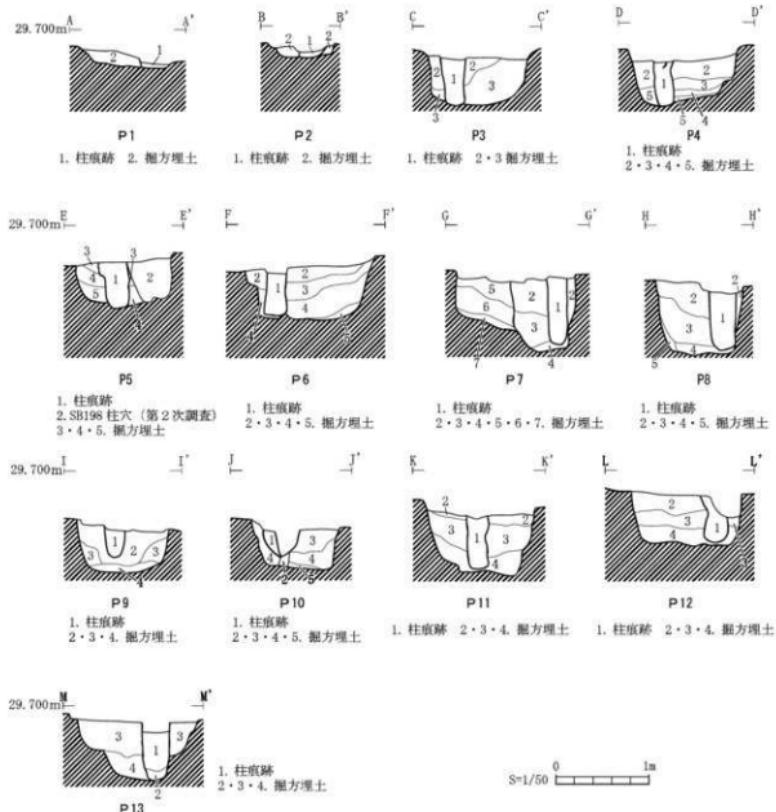
【位置】南区の北東部、X=-187,904～-187,909、Y=14,100～14,105に位置し、標高値は28.7～29.1mである。4基の柱穴を確認しており、位置関係から建物跡の西半部に相当する。



第2図 調査区全体図



第3図 S B60 樹立柱建物



第4図 SB 606 挖立柱建物跡断面図

【変遷】2時期変遷（A→B期）を確認した。

【桁行・梁行】A期、B期ともに桁行2間以上、梁行2間の東西棟建物跡である。建物東側はSD 595によつて失われる。

【重複】SI 607と重複し、それよりも新しい。

・A期

【柱痕跡・抜取り穴の有無】全ての柱穴で、柱抜取り穴を確認した。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると、東で約13度南に偏している。建物の規模は北側柱列で測ると総長2.5m以上、梁行は約4.4mである。

【掘方】平面形は隅丸方形状を基調とする。規模は、P 3で測ると長径56cm、短径48cm、深さ72cmであ

る。埋土は明黄褐色土（10YR6/6）や黄褐色土（10YR5/6）が主体であり、基盤層土の小ブロックを斑状に多く混入する。

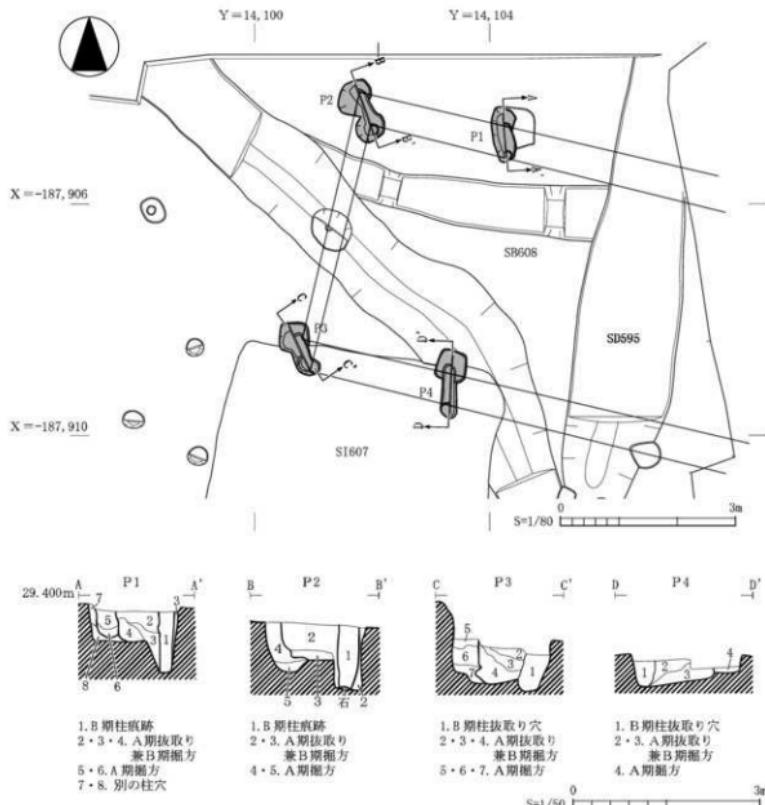
**【柱抜取り穴の平面形・規模・埋土】** いずれも柱穴の中心部から南に長い楕円形であり、柱穴中心が柱の当たり痕跡である可能性が高い。規模は、長径約80cm、短径約30cmであり、埋土は基盤層土の小ブロックを混入する。

**【遺物】** 出土遺物は無い。

#### ・B期

**【柱痕跡・抜取り穴の有無】** P1・2で柱痕跡、P3・4で柱抜取り穴を確認した。

**【方向・規模】** 方向は北側柱列で測ると、東で11度3分南に偏している。建物の規模は北側柱列で測ると



第5図 SB608掘立柱建物跡平面・断面図

総長 2.56 m 以上、梁行は約 4.4 m である。

【掘方】掘方は A 期の抜取り穴を兼用しており、平面形は梢円形である。規模は、P 3 で測ると長径約 80 cm、短径約 30 cm、深さ 50 cm である。埋土は明黄褐色土（10YR6/6）や黄褐色土（10YR5/6）が主体であり、基盤層土の小ブロックを斑状に多く混入する。

【柱痕跡の平面形・規模・埋土】直径約 20 cm 円形であり、埋土は明黄褐色、暗褐色、黒褐色粘質土である。

【柱抜取り穴の平面形・規模・埋土】いずれも円形であり、規模ははいざれも直径約 30 cm である。埋土には基盤層土の小ブロックを混入する。

【遺物】土器器坏（B 類）が出土している。

#### S I 607 穴住居跡（第 6 ~ 12 図）

【位置】南区の東部、X=-187, 908 ~ -187, 918、Y=14, 099 ~ 14, 10 で確認した。緩やかな斜面上に位置し、建物の北側が高く、南側が低い。標高値で 29 ~ 29.5 m である。

【残存状況】S D 605 により北東角の床面と周溝上面、S B 608 の柱穴により北辺 2 箇所が失われる。また、建物の南側を幅 2 m の S D 603 が横断し、この部分が大きく破壊されているほか、南西部の周溝も擾乱によって上面がおおきく削られている。重複する遺構等によって部分的な破壊はあるものの、全体としては良好な残存状況である。

【重複】S B 608、S D 603・605 と重複し、それよりも古い。

【平面形・方向】平面形は南北軸を長辺とする 2 : 1 の長方形である。方向は北で約 6 度東に偏している。

【規模】東西約 4.8 m、南北約 9.6 m である。

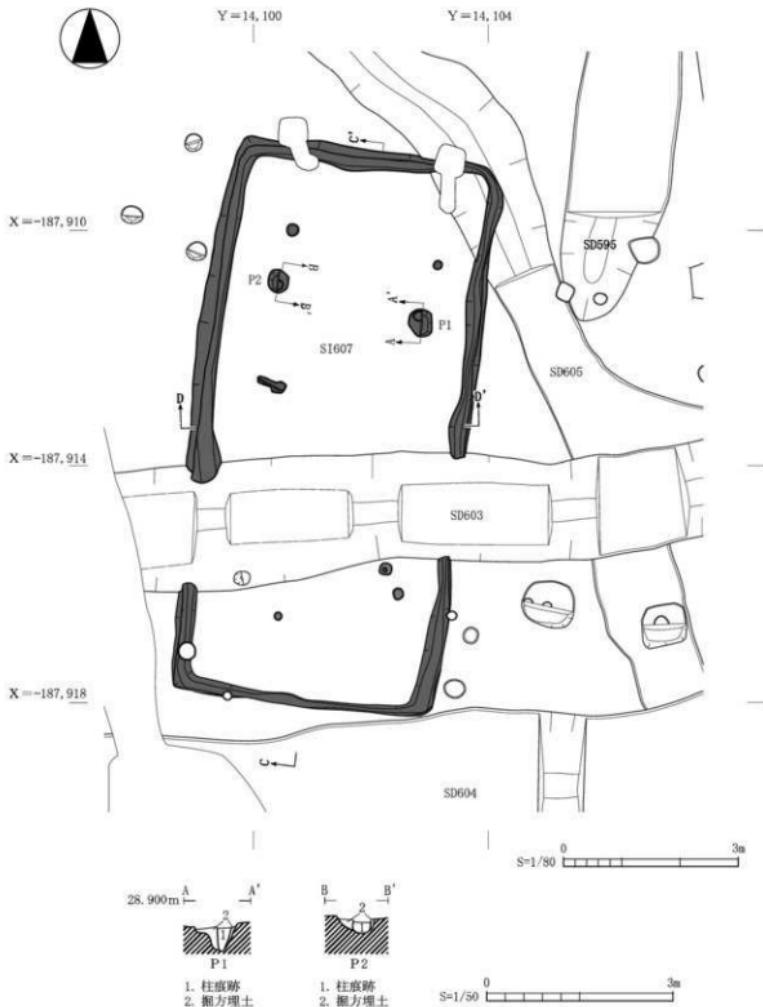
【壁の状況・周溝】壁は周溝の底面から僅かに外彎しながら立ち上がる。残存状況の良好な北壁で 43 cm である。周溝の規模は上端幅 20 ~ 26 cm、深さは約 10 cm 前後である。周溝の東・西・北辺では、壁断面が壁上端から周溝底部で円弧状を呈しており、周溝底部の壁は外に向かって 5 ~ 7 cm 挖り込まれる。

【床面の状況】床面は北から南に向かって 1.3 度の傾斜で低くなり、南端と北端では床面の高低差が 20 cm ある。貼床や整地土の痕跡がないことから、掘り込んだ基盤層の上面をそのまま床面として使用したと推測される。

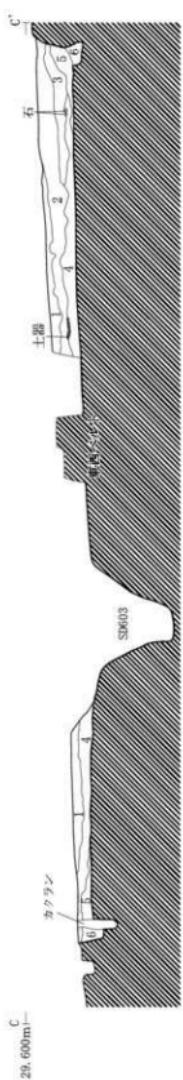
【支柱穴】P 1・2 の 2 基を確認した。P 1 は掘方が直径 43 cm の円形で、柱の直径が 13 cm、深さ 26 cm である。P 2 の掘方は直径 37 cm の円形で、柱の直径が 18 cm、深さ 14 cm である。その他のピットについては深さが 2 ~ 3 cm と非常に浅く、性格は不明である。

【カマド】S D 603 により破壊される箇所を除き焼土・炭層は認められないことから、カマドは敷設されていない可能性が極めて高い。

【遺物】土器器坏（A・A II・B II・B II c・B II c・B V 類）、高台付坏・稜塊・甕（A 類）、須恵器坏（I・I a・I c・II・II c・III・V 類）、高台付坏・稜塊・蓋・長頸瓶、灰釉陶器双耳瓶蓋・丸瓦（II 類）、瓦（II b 類）、鉄滓が出土している。土器器の出土数は極めて少ないほか、須恵器坏では II・III 類の出土が圧倒的に多く、V 類は小片が 1 点出土するのみである。

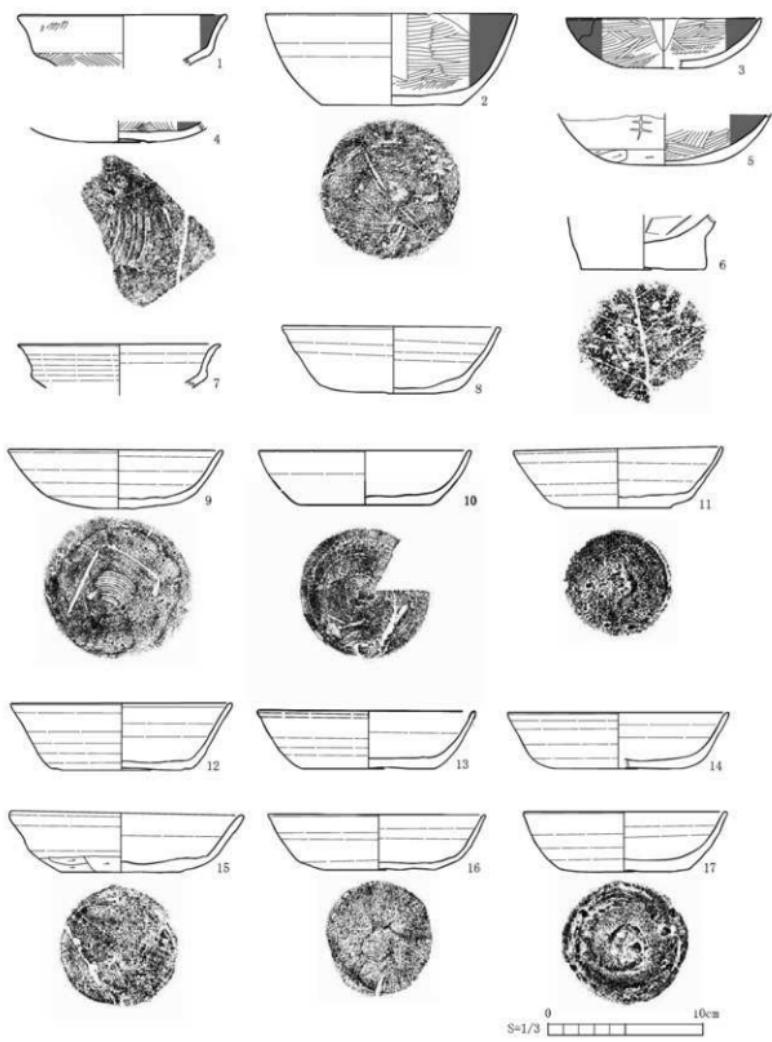


第6図 S1607竪穴住居跡平面・断面図

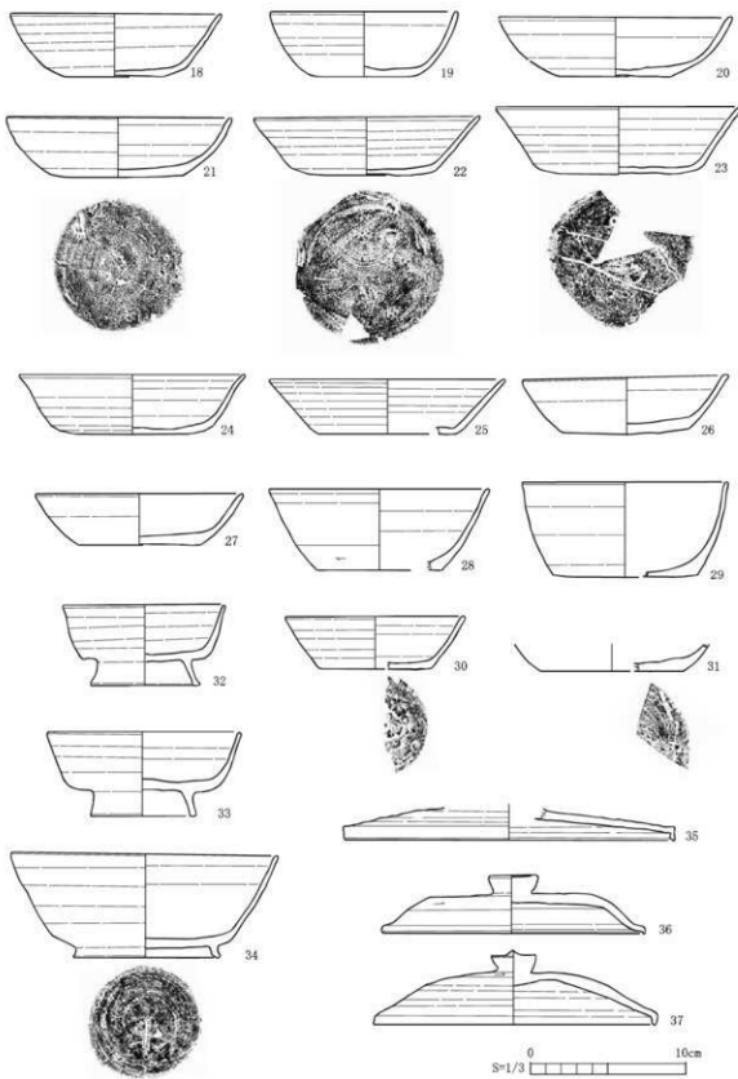


1. 黄灰色土。黄褐色セメントロック（直徑1cm）を少數含む。
2. 黄灰色土。酸化鉄を多量に含む。
3. 黄褐色土。崩落して流れ込んだ基盤層のブロックを含む。
4. 黄灰色土。微量の炭化物を含む。鐵物を多量に含む。
5. にがい。黄褐色土。崩落して流れ込んだ基盤層のブロックを含む。
6. 沈積褐色土。堅穴住居周囲の押土である。
- SD-1/50 0

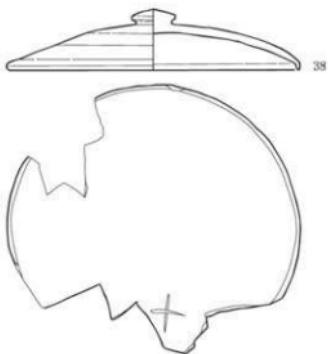
第7図 S 1607 堅穴住居断面図



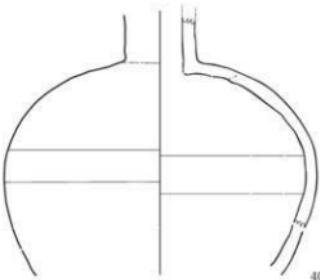
第8図 S 1607 出土土器 (1)



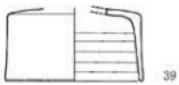
第9図 S I 607 出土土器 (2)



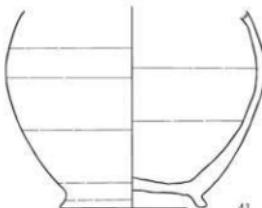
38



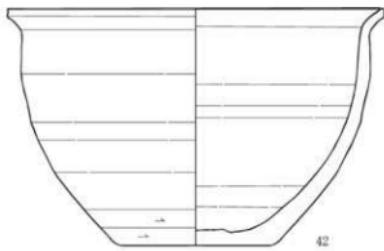
40



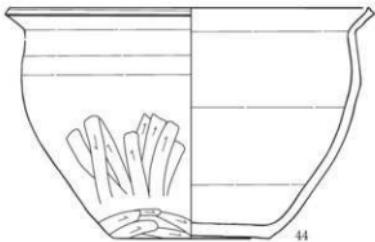
39



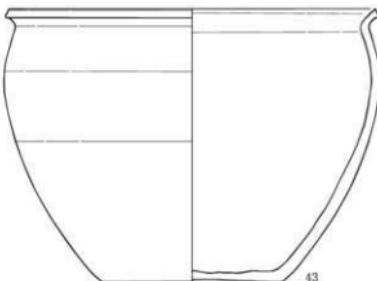
41



42



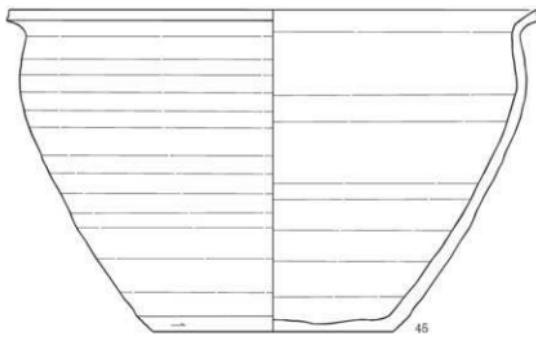
44



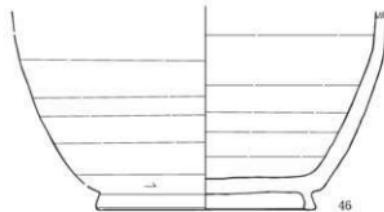
43

0  
S=1/3 10cm

第10図 S I 607出土土器(3)



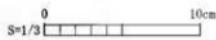
45



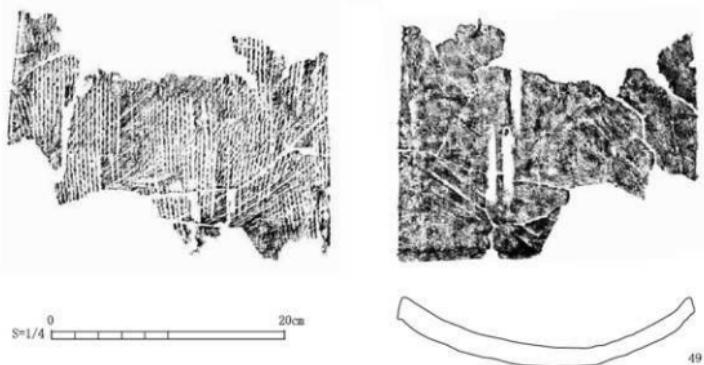
46



47



第11図 S 1607出土土器 (4)



第12図 S I 607 出土土器（5）

第8図 S 1607注上土器(1) 観察表

番号	種類	部位	特徴		口徑 横在半	底径 横在半	高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	上部唇 被覆	4周	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 5/24	—	—	—	R-86	
2	上部唇 被覆	4周	ロクロナダ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナダ ヘラミガキ→黒色処理	(16.0) 1/24	(8.8) 22/24	6.9	—	R-91	H II 種
3	上部唇 被覆	4周	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理	(12.4) 6/24	(4.9) 8/24	3.2	—	R-86	A II c 種
4	上部唇 被覆	4周	ヘラケズリ 底部：静止糞切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	— 6/24	(9.0) 6/24	—	—	R-85	B II b 種
5	上部唇 被覆	4周	手持ちラケズリ 底部：切り離し不明→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	— 16/24	(7.6) 16/24	—	—	R-85	A II 種 外面部にヘラ書き「キ」
6	上部唇 被覆	4周	底部：木葉痕	ヘラナダ	— 21/24	8.1 21/24	—	—	R-94	A 種
7	垂直空 窓	4周	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理	(13.0) 3/24	—	—	—	R-98	
8	垂直空 窓	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.9) 8/24	8.25 24/24	4.3	II-5	R-98	III 種
9	垂直空 窓	4周	ロクロナダ 底部：回転糞切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(13.6) 11/24	9.3 24/24	3.75	II-5	R-85	II c 種
10	垂直空 窓	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロナダ	(13.4) 1/24	(8.35) 20/24	3.5	—	R-33	I a 種
11	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.4) 13/24	6.8 21/24	3.8	II-2	R-37	III 種
12	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(14.1) 11/24	(7.6) 18/24	4.3	II-1	R-36	III 種
13	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.35) 18/24	6.4 24/24	3.75	II-4	R-39	III 種
14	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(14.1) 1/24	(8.6) 12/24	3.6	—	R-43	III 種
15	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(14.9) 16/24	7.7 21/24	3.8	II-6	R-41	II 種
16	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：回転糞切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(14.0) 14/24	7.0 21/24	3.55	II-7	R-42	II c 種
17	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.0) 8.5/24	8.4 24/24	3.85	II-5	R-40	III 種

第9図 S 1607注上土器(2) 観察表

番号	種類	部位	特徴		口徑 横在半	底径 横在半	高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
18	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：手持ちヘラケズリ 底部：回転糞切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(13.5) 15/24	6.2 24/24	4.05	II-4	R-82	II c 種
19	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(11.9) 2/24	(7.0) 13/24	4.2	—	R-60	III 種
20	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(14.7) 2/24	7.1 23/24	3.8	II-6	R-54	I c 種
21	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(14.3) 10/24	8.4 21/24	3.85	II-7	R-65	III 種 底部外側ヘラ書き
22	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：回転糞切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(14.5) 19.5/24	(7.2) 23/24	3.75	II-8	R-66	II c 種
23	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(15.6) 6/24	(7.8) 19/24	4.35	R-57	III 種 底部外側ヘラ書き	
24	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(14.5) 1/24	(8.4) 22/24	3.8	—	R-58	III 種
25	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	(15.0) 6/24	(9.2) 3/24	3.5	—	R-69	II 種
26	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.1) 10/24	8.1 24/24	3.65	II-4	R-47	III 種
27	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.2) 7/24	(7.8) 10/24	3.3	—	R-48	III 種 軸用底
28	直唇 底	4周	ロクロナダ 底部：凹面ヘラケズリ	ロクロナダ	(14.0) 7/24	(8.2) 2/24	6.2	—	R-91	I 種

第9回 S 1607出土上器（2）瓶底表

番号	種類	部位	特徴		口徑 残存率	直径 残存率	基高	方真 回版	壁厚 百分比	備考
			外面	内面						
29	瓶底 环	4周	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 5/24	(9.2) 7/24	6.1	—	R-35	環底
30	瓶底 环	4周	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.3) 6/24	(7.0) 6/24	3.4	—	R-45	環底
31	瓶底 环	4周	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	(9.2) 5/24	—	—	R-46	環底 底部外面にヘラ書き「—」
32	瓶底 底台付环	4周	高台輪付→ロクロナデ・ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(10.3) 21/24	(7.05) 20/24	5.2	12-2	R-49	
33	瓶底 底台付环	4周	高台輪付→ロクロナデ・ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.2) 6/24	(6.65) 24/24	5.4	11-8	R-44	
34	瓶底 底台付环	4周	高台輪付→ロクロナデ・ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(17.0) 16/24	(9.3) 20/24	6.7	12-3	R-61	底部外面にヘラ書き「林」
35	瓶底 直	4周	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.3) 21/24	—	—	—	R-66	
36	瓶底 直	4周	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.9) 15/24	—	3.8	13-3	R-63	
37	瓶底 直	4周	ロクロナデ・ナデ 底部：ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	(18.0) 16/24	—	4.8	13-2	R-62	

第10回 S 1607出土上器（3）瓶底表

番号	種類	部位	特徴		口徑 残存率	直径 残存率	基高	方真 回版	壁厚 百分比	備考
			外面	内面						
38	瓶底 直	4周	ロクロナデ	ロクロナデ	(18.6) 13/24	—	3.9	13-1	R-61	内面にヘラ書き「X」
39	瓶底 底耳底直	4周	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(8.8) 3/24	(8.3) 2/24	—	13-4	R-69	
40	瓶底 底耳瓶	4周	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	—	R-74	
41	瓶底 長耳瓶	4周	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	—	9.4 24/24	—	13-6	R-68	底面に「東」のヘラ書き
42	瓶底 壳	4周	ヘラケズリ・ロクロナデ 底部：切り離し不規	ロクロナデ	(28.0) 8/24	(16.4) 19/24	16.3	—	R-71	
43	瓶底 直	4周	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(23.6) 10/24	11.6 24/24	17.5	—	R-72	
44	瓶底 直	4周	手持ちヘラケズリ 武器：切り離し不明	ロクロナデ	(23.2) 12/24	(9.9) 20/24	14.8	13-5	R-67	

第11回 S 1607出土上器（4）瓶底表

番号	種類	部位	特徴		口徑 残存率	直径 残存率	器底	方真 回版	壁厚 百分比	備考
			外面	内面						
45	瓶底 直	4周	回転ヘラケズリ・ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(33.8) 3/24	(18.5) 17/24	20.7	—	R-73	
46	瓶底 直	4周	ロクロナデ 底部下半：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	(14.0) 22/24	—	—	R-70	
47	瓶底 壳	4周	ロクロナデ・平行タタキ	ロクロナデ	(18.6) 8/24	—	—	—	R-76	

第12回 S 1607出土上器（5）瓶底表

番号	種類	部位	特徴		口徑 残存率	直径 残存率	器底	方真 回版	壁厚 百分比	備考
			外面	内面						
46	瓶底 直	4周	平行タタキ→ロクロナデ 底部：丸底	ロクロナデ→ナデ	—	4.0 24/24	—	—	R-78	
48	平底	4周	表面：布目・名刺り→ナデ 内面：鶴印き	—	—	—	—	—	R-80	II b類

### SD 603 区画溝（第 13 ~ 15 図）

【位置】南区の中央で検出した。

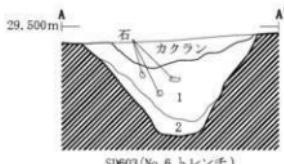
【重複】SI 607、SD 604 と重複する。SI 607 より新しく、SD 604 より古い。

【規模・方向】東西方向の溝で、東で約 3 度南に偏している。長さは 48 m 以上であり、上端幅約 2 m、下端幅約 0.5 m、深さ 0.7 ~ 1 m である。溝全体が緩やかな弧を描き、最大で約 1.6 m 南へ膨らむ。

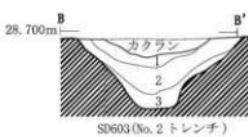
【形・底面】溝の断面は逆台形である。底面の標高は西側で 28.3 m、東で 27.9 m であり、東側が約 40 cm 低い。

【埋土】2 ~ 3 層に区分される。いずれの層も人為的な埋土で、基盤層土のブロックを多量に含む。

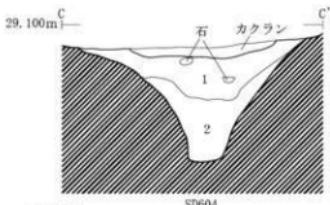
【遺物】施釉陶器平碗、瓦質土器擂鉢のほか、古代の土器片が出土している。



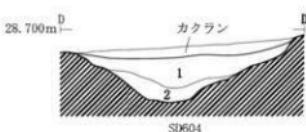
1. 暗灰色土  
基盤層の小ブロック（直径 1 ~ 2 cm）を多量に含む。
2. 暗色粘質土  
褐色灰土の小ブロック（直径 3 ~ 4 cm）を多量に含む。



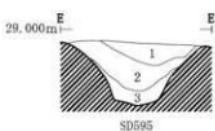
1. 黒色土  
基盤層の小ブロック（直径 1 cm未満）を僅かに含む。
2. 褐色土  
基盤層の小ブロック（直径 1 ~ 2 cm）を多量に含む。
3. 暗色粘質土  
褐色灰土の小ブロック（直径 3 ~ 4 cm）を多量に含む。



1. 暗色土  
斑状で小礫や石を多く含む。人為的な埋め立て層
2. にぶい黄褐色粘質土  
均質で下層ほど粘質土する。自然堆積層



1. 暗色土  
斑状で小礫や石を多く含む。人為的な埋め立て層
2. にぶい黄褐色粘質土  
均質で下層ほど粘質土する。自然堆積層

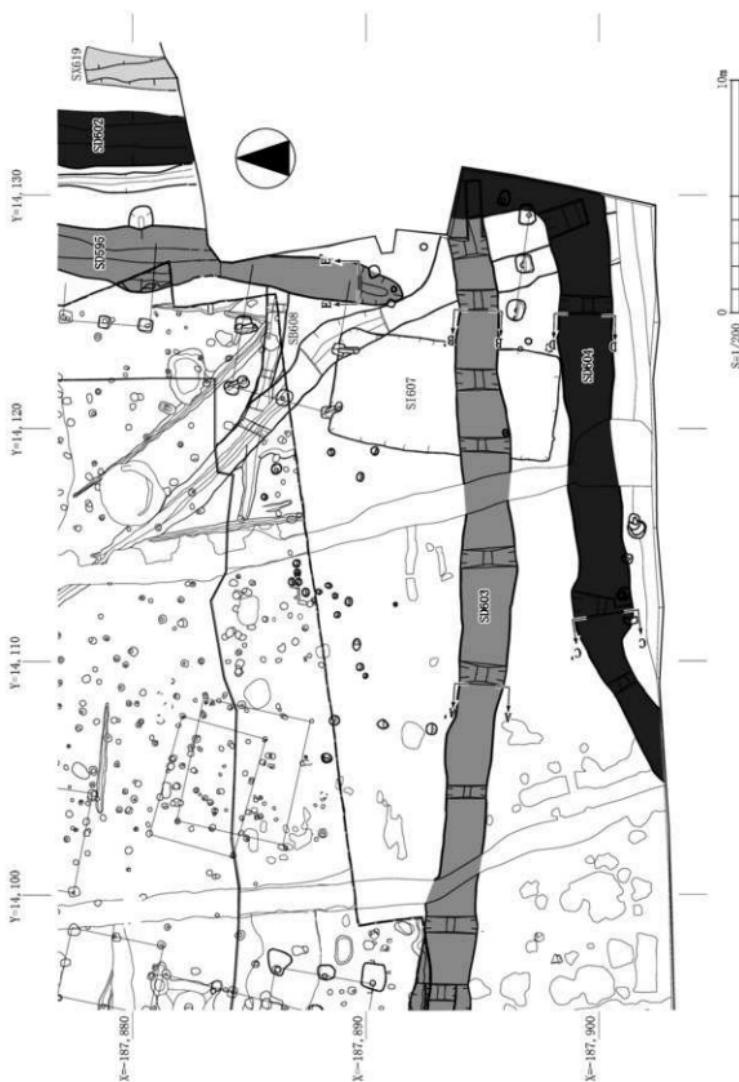


1. にぶい黄褐色土  
基盤層の小ブロック（直径 1 cm前後）を少量含む。
2. 黒色粘質土  
基盤層の小ブロック（直径 1 cm前後）を僅かに含む。
3. 暗灰色土  
底面に酸化鉄を多量に含む。

S=1/50 0 1m

第 13 図 南区遺構断面図

第14図 南調査区平面図



### SD 604 区画溝（第 13・14 図）

【位置】調査区の南東部で検出した。

【重複】SD 603 と重複し、それよりも新しい。

【規模・方向】東西・南北方向の区画溝である。東西方向の溝が調査区東側で北に曲がり、東 4 区検出の SD 602 に続くと推定される。東西方向西側は調査区外に延びる。方向は東西方向部分で見ると、西で約 13 度南に偏している。南区検出の長さは 30 m 以上、上端幅約 2.1 m、下端幅 0.4 ~ 0.5 cm、深さ 0.7 ~ 1.2 m である。南区検出の西端部にあたる調査区南壁付近では、規模が縮小し、上端幅が 1 ~ 1.5 m、深さが 0.5 m である。

【形・底面】溝の断面は逆台形で、壁は緩やかに外彎しながら立ち上がる。底面の標高は西側で 27.6 m、東側で 27.9 m であり、東側が 30 cm 低い。

【埋土】2 ~ 3 層に区分される。いずれも人為的理土で、基盤層土のブロックを多量に含む。

【遺物】古代の土器片や平瓦が出土している。

### SD 595 区画溝（第 13 ~ 15 図）

【位置】南区の北東部で検出した。

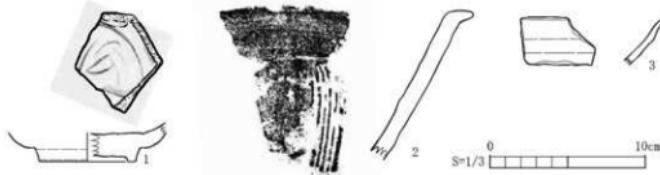
【重複】古代と推定される溝と重複しており、それよりも新しい。

【規模・方向】南北方向の区画溝で、南端部分を検出した。区画溝は北側の東 3 区、東 4 区に続き、東 3 区で直角に西へ曲がる。南北部分は緩やかな弧を描き、最大で 5 m 東へ膨らむ。東西部分はほぼ直線状で、東で約 6 度南に偏している。全長 80 m で、南北方向が 47 m、東西方向が 33 m である。

上端幅 1.7 ~ 2.6 m、下端幅 20 ~ 30 cm、深さ 70 ~ 80 cm である。

【形・底面】南区の断面形は逆台形状である。東区では V 字もしくは碗状を呈する。壁は底部から 50 ~ 60 度の角度で直線状もしくは僅かに外彎・内彎しながら立ち上がる。

【埋土】3 層に区分される。最上層は基盤層のブロック（φ 1 ~ 10 cm・10YR5/6 黄褐色粘質土）を多く含む人為的な理土だが、下層は自然堆積層である。



番号	種類	遺構 層位	剖面		口径 残存半 径存半 径高	壁 厚 底 高 底 面 形 状 参考	登録 番号
			外因	内面			
1	青銅 瓦	SD595 1 層		片彫連草文	— (6.2) 8/24	—	8-28 大寺分類 陶 1 類 2 a
2	瓦質土器 信標	SD603 1 層	ロクロナデ	ロクロナデ	— — —	—	8-96
3	施釉陶器 平継	SD603 1 層	ロクロナデ 口縁部～体部：灰釉	ロクロナデ	— — —	—	8-98 古窯 14 後原式重期

第 15 図 SD 595・603 出土遺物

【遺物】須恵器甕、軒丸瓦、平瓦、青磁碗（大宰府編年・龍泉窯系青磁碗Ⅰ類）、青花碗（明代）、中世無軸陶器が出土している。

【東1調査区検出遺構】

S D 573 溝跡（第16・17図）

【位置】調査区の中央で検出した。

【変遷】およそ同位置で2時期の変遷（A→B期）があると判断した。

・A期

【規模・方向】南北方向の溝である。北は調査区外へ、南は東3区に及ぶ。方向は北で約11度東に偏している。規模は全長53m、上端幅は0.7～1m、下端幅は20～30cm、深さ約50cmである。壁は底部から緩やかに立ち上がる。溝の上面はB期により大部分が失われる。

【埋土】にぶい黄褐色土の自然堆積である。

【遺物】土師器壺、須恵器壺（V類）、須恵器甕、丸瓦、平瓦が出土している。

・B期

【規模・方向】南北方向の溝である。北は調査区外へ、南は東3調査区に及ぶ。方向は北で約11度東に偏している。規模は全長53m、上端幅は約2m、下端幅は1.5～1.8m、深さ約20～30cmである。断面は皿状で、壁は底部から緩やかに立ち上がる。

【埋土】にぶい黄褐色土の自然堆積である。

【遺物】土師器壺、須恵器甕、平瓦が出土している。

S D 574 溝跡（第16・17図）

【位置】調査区東側で検出した。

【変遷】およそ同位置で2時期の変遷（A→B期）があると判断した。

・A期

【規模・方向】南北方向の溝である。溝の南側はB期により失われる。方向は北で約11度東に偏する。確認できる部分で規模は全長16m以上、上端幅は約1.2m、下端幅は20～30cm、深さ約40cmである。壁は底部から緩やかに立ち上がる。

【埋土】にぶい黄褐色土の自然堆積である。

【遺物】出土遺物は無い。

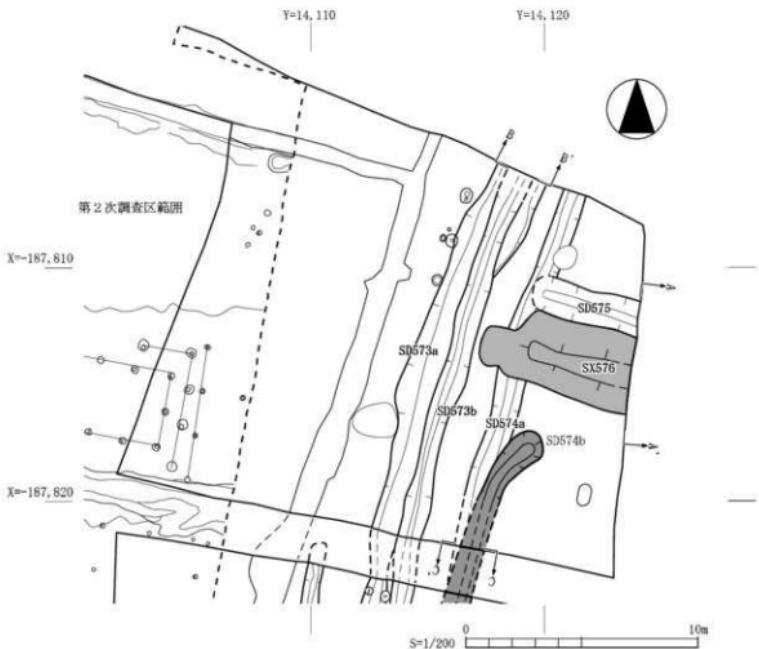
・B期

【規模・方向】南北方向の区画溝で、南側は東2区に及ぶ。北端部3mは僅かに東へ曲がる。方向は北で約10度東に偏する。全長18mで、上端幅0.9～1.4m、下端幅約50cm、深さ60～70cmである。

【形・底面】断面形は逆台形状である。壁は底部から70～80度の角度で直線状に立ち上がり、上端部で外彎する。

【埋土】3層に区分される自然堆積層で、にぶい赤褐色土・黄褐色粘質土・にぶい黄橙色土である。

【遺物】出土遺物は無い。



第16図 東1調査区平面図

**SD 575 区画溝**（第16・17図）

【位置】調査区の北東で確認した。

【重複】SD 574 A期と重複し、それよりも新しい。

【規模・方向】東西方向の区画溝で、南側にSX 576 土塁が並行する。方向は東で約17度南に偏している。規模は全長5m以上、上端幅は約1.5m、下端幅は30~50cm、深さ約60cmである。南に隣接するSX 576頂部と構底面の高低差は1mを計る。

【形・底面】断面形状は逆台形状である。南壁は底部から30~50度の角度で立ち上がり、SX 576の稜線に連続する。

【埋土】褐色・明黄褐色土の自然堆積である。

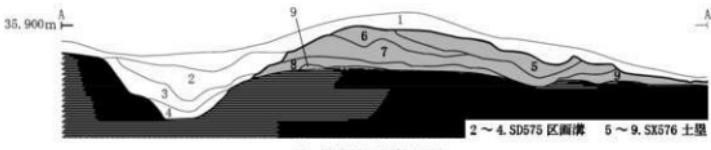
【遺物】須恵器甕、平瓦が出土している。

**SX 576 土塁**（第16・17図）

【位置】調査区の東部で検出した。

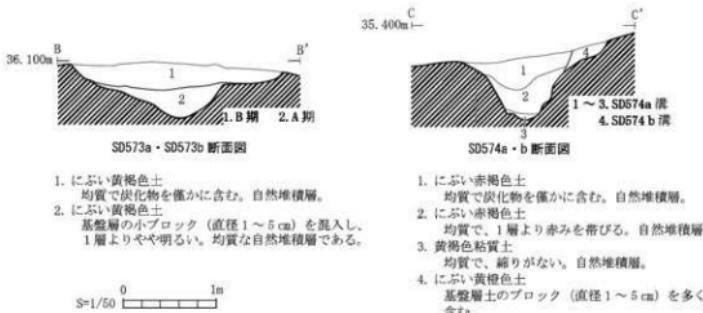
【重複】SD 574 A期と重複し、それよりも新しい。

【規模・方向】東西方向の土塁である。東側は調査区外に延び、延長部約10mにわたって土塁の高まりを



東1調査区 東壁断面図

1. 黄土に、ぶい黄褐色土。
  2. 明褐色土、均質だが底部中央は粘質土化する。炭化物を僅かに含む。自然堆積層。
  3. 明褐色粘質土、均質で炭化物を僅かに含む。自然堆積層。
  4. 明黃褐色土、基盤層土の流れ込み。
  5. 黄褐色粘質土、基盤層土に類似する。均質である。
  6. 黄褐色粘質土、5層に類似するが、全体にやや赤色を帯びる。均質である。
  7. に、ぶい黄褐色土。
  8. 黄褐色土、均質で炭化物を僅かに含む。
  9. 黄褐色土質土、基盤層である。均質で枯りが強く、繋りがある。



第17圖 東1調査区遺構断面図

確認できる。北側にSD 575が平行する。方向は東で約17度南に偏っている。検出規模は東西約7mで、其底幅は調査区東壁部分で約4m、残存高は45cmを計る。

【積土】旧表土である基盤層上に積み上げており、4層に区分できる。いずれも基盤層に類似する土で、均質な黄褐色の粘質土である。

【遺物】出土遺物は無い。

#### 〔東2調査区抽出遺構〕

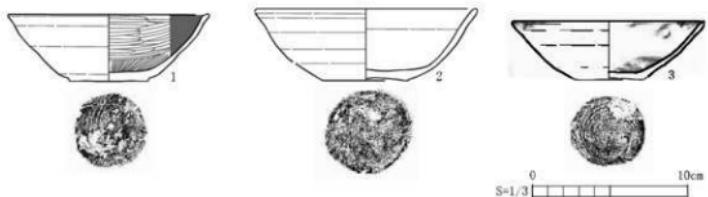
SK 616 土壌 (第 18 ~ 19 図)

【位置】調查區中央子破裂口之

【重複】古代の漢と重複】 それよりも古い

【平面形・相模】裾方は直径 65 cm の円形で、深さは約 20 cm である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は底面から急角度で立ち上がる。



番号	種類	層位	特徴		山形 残存率	底径 残存率	高さ	写真 回数	標本 番号	参考
			外面	内面						
1	土師器 坏	I層	ロクロナデ 底部：圓断糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色燒光	12.8 12/24	5.0 24/24	4.3	14-6 R-81	B II C類	
2	須恵系土器 坏	I層	ロクロナデ 底部：圓断糸切り	ロクロナデ	(14.0) 11/24	5.4 24/24	4.6	14-6 R-82		
3	須恵系土器 坏	I層	ロクロナデ 底部：圓断糸切り	ロクロナデ	12.4 12/24	4.4 24/24	3.8		R-92	

第18図 SK616出土土器

【埋土】黒褐色土の単層で、焼土粒を僅かに含む。

【遺物】土師器坏（B類）、須恵系土器が出土している。

#### 【東3調査区検出遺構】

##### S D 587区画溝（第21図）

【位置】調査区北東部で検出した。

【重複】古代と推定される小溝と重複しており、それよりも新しい。

【規模・方向】東西方向の区画溝で、東側は調査区外へ延びる。全長9m以上で、上端幅1~1.5m、下端幅20~30cm、深さ70~80cmである。

【形・底面】断面形は逆台形状である。壁は底部から50~60度の角度で直線状に立ち上がる。

【埋土】3層に区分される。いずれも灰黄褐色土の自然堆積層である。

【遺物】出土遺物は無い。

##### S D 589区画溝（第21・22図）

【位置】調査区中央で検出した。

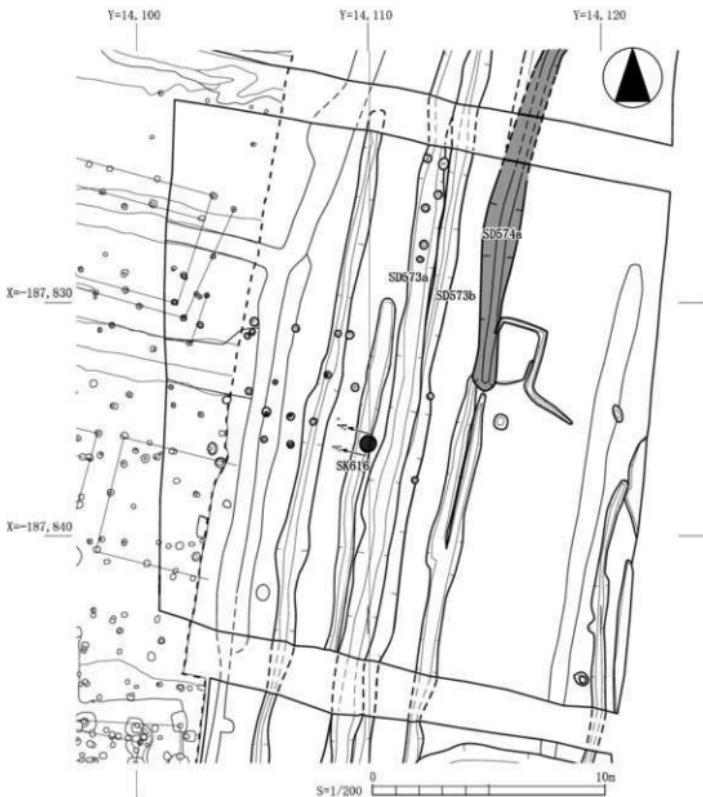
【重複】古代と推定される小溝と重複しており、それよりも新しい。

【規模・方向】南北方向の区画溝で、北端部3mは西に曲がる。南側は擾乱により失われる。全長13m以上で、上端幅1~1.5m、下端幅20~30cm、深さ40~80cmである。

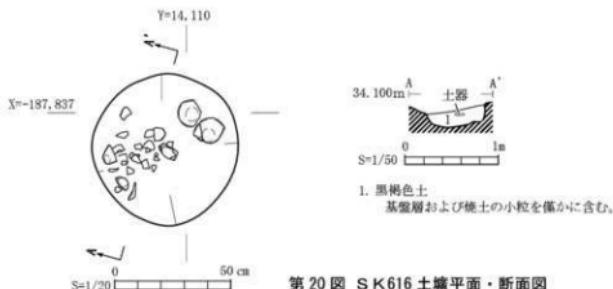
【形・底面】南北の断面形は北側でV字、南側は碗状である。壁は底部から50~60度の角度で立ち上がる。

【埋土】3層に区分される自然堆積層で、褐色・灰黄褐色・褐色土である。

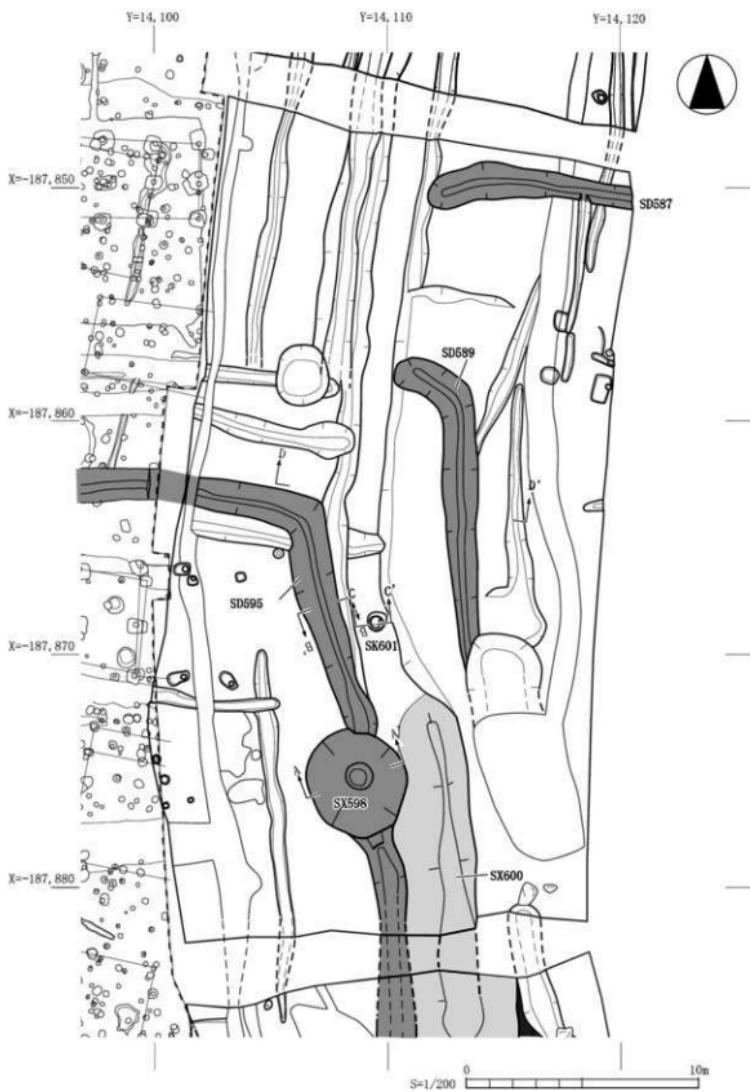
【遺物】土師器坏、須恵器杯（V類）、須恵器甕、平瓦、石棒、骨が出土している。



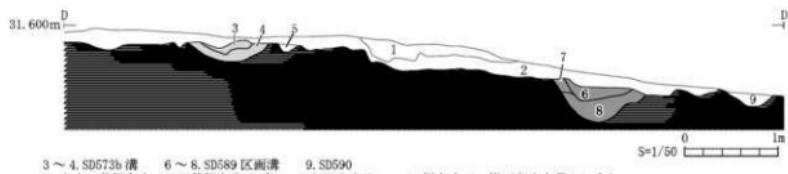
第19図 東2調査区平面図



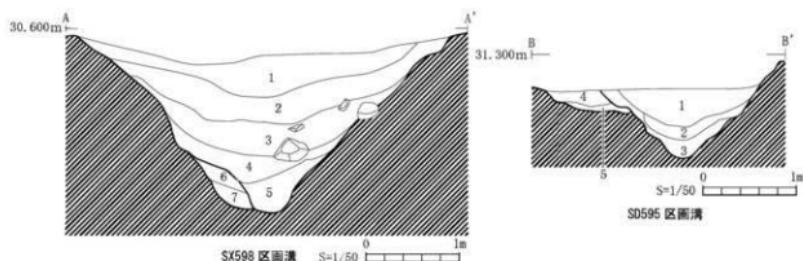
第20図 SK616 土壌平面・断面図



第21図 東3調査区平面図

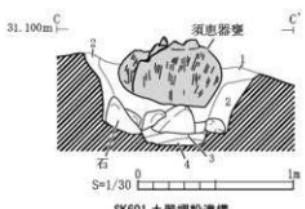


第22図 東3調査区 東西ベルト断面図



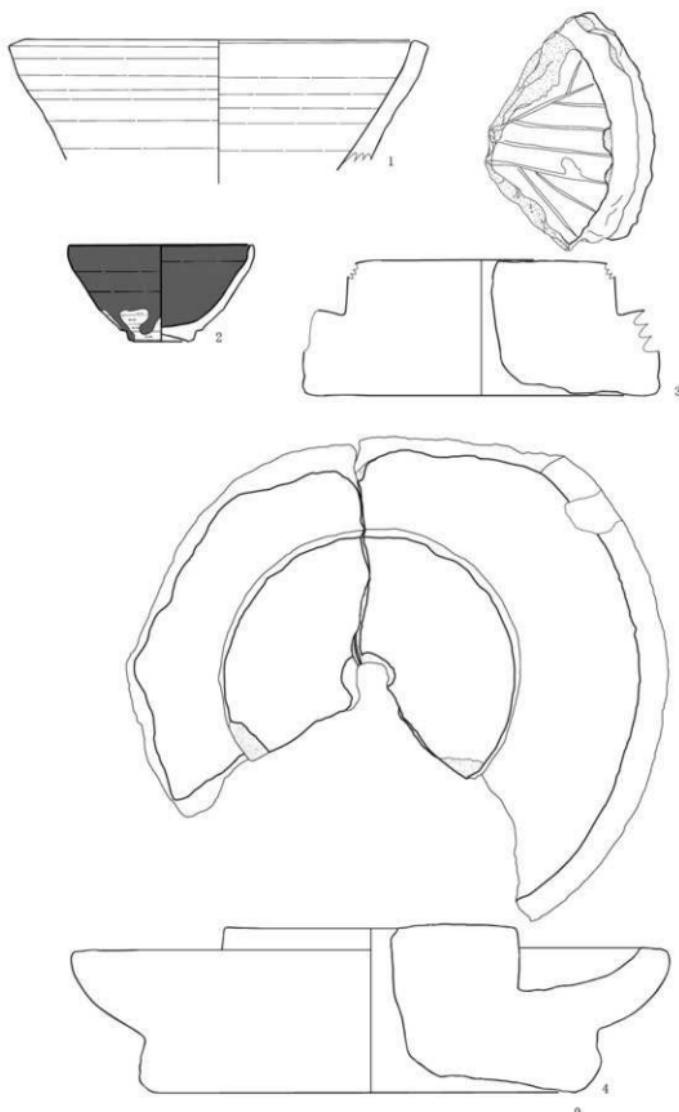
1. 褐灰色土。やや砂質で炭化物を僅かに含む。
2. 褐灰色土。基盤層の小粒を多く含む。炭化物を微量に含む。
3. 黄灰色土。基盤層の土と褐色灰土の互層で、マーブル状を呈する。
4. 明褐色土。基盤層の小ブロック ( $\phi 1 \sim 5$  cm) が主体で、粘土の葉理堆積を含む。
5. 灰色粘質砂質土。炭化物を含む。
6. 灰色粘土。粘りの強い粘土で、固く締まる。
7. 灰色粘質砂。薬理堆積が見られる。

- 1 ~ 3. SD595 区画溝 4 ~ 5. SD573b 溝
1. 明黄色土。基盤層の小ブロック ( $\phi 1 \sim 5$  cm)
2. にぶい黄褐色土。基盤層の小ブロック ( $\phi 1 \sim 5$  cm) を層状に含む。炭化物を含む。
3. にぶい黄褐色土。炭化物を含む。
4. 褐色土。均質である。
5. 黄褐色土。基盤層の土を多く混入する。



1. 褐灰色土。基盤層の小粒を微量に含む。
2. にぶい黄褐色土。基盤層土主体で褐色灰土を少量混入する。
3. 灰白色土。均質である。
4. にぶい黄褐色土で暗褐色土を少量含む。

第23図 東3調査区遺構断面図



第24図 S X598出土遺物

第24図 S X 598[1]上塗物 製造表

番号	種類	層位	形状		口径 復元率	底径 復元率	高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外周	内面						
1	無釉陶器 擂鉢	I層		片頭連環文	(25.1) 8424	—	—	I-7	R-18	
2	天目茶碗	I層	底部：四輪ヘラケズリ、鉢脚 体部下半：墨粉	鉢脚	(11.7) 11/24	3.4 24/24	6.2	I-6 I-6	R-1	
3	茶臼 下臼	I層	白面径：(17.0)、高さ8.7、6又は8箇分の目					I-3	R-3	
3	茶臼 下臼	I層	白面径：38.5、白面径：19.5、高さ10.6					I-1	R-2	

### S X 598 水溜施設（第 21・23・24 図）

【位置】調査区南部で検出した。

【重複】重複は無い。

【規模・方向】S D 595 に接続する円錐形の土壌で、水溜等を目的とした施設と推定される。規模は上端直径 4.5 ~ 5 m の円形で、深さが 2 m である。底部に掘直しの痕跡がある。

【形・壁】断面は円錐形で、壁は底部から 45 度の角度で立ち上がる。

【埋土】7 層に区分できる。3 層は人為的な埋土で基盤層のブロックを多量に含む。4 層以下は水性堆積した粘土や砂の互層である。

【遺物】3 層より無釉陶器擂鉢、天目茶碗、茶臼が出土している。

### S X 600 土壘（第 21・26 図）

【位置】調査区南部で検出した。西側に S D 595 区画溝、東側に S D 602 区画溝が位置する。

【重複】重複はない。

【規模・方向】南北方向の土壘である。方向は北で 8 度西に偏している。規模は残存部で全長 18 m である。基底幅は約 4 m、残存高は 45 cm である。

【積土】旧表土上に基盤層に類似する黄褐色粘質土を積み上げる。

【遺物】遺物の出土は無い。

### S K 601 土器埋設遺構（第 21・23・25 図）

【位置】調査区中央で確認した。

【重複】重複は無い。

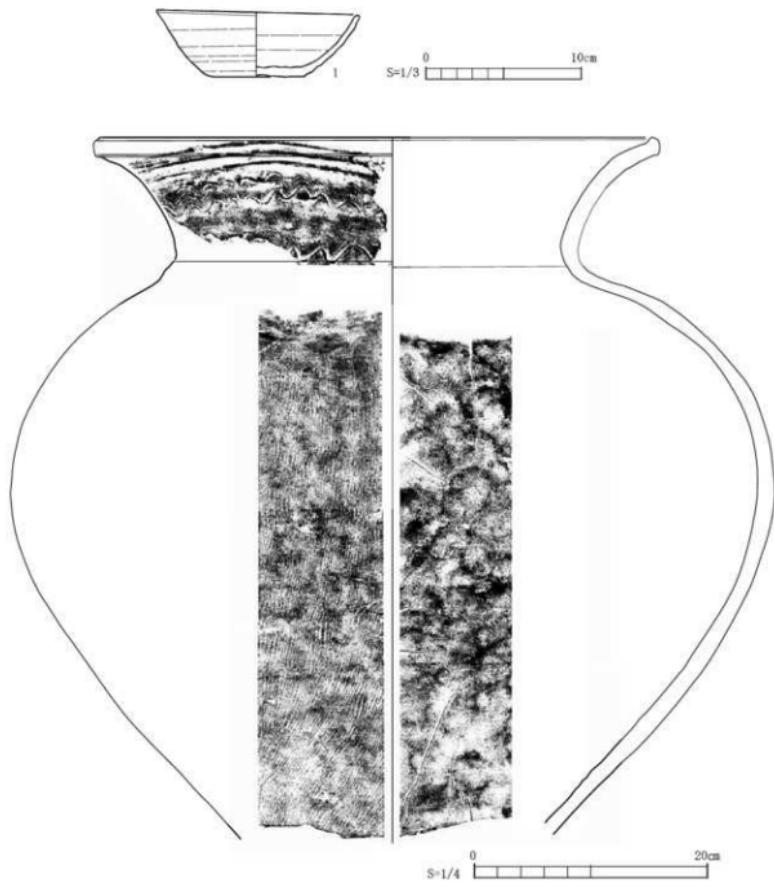
【平面形・規模】掘方は直径 1 m の円形で、深さは最深部で約 70 cm である。

【壁・底面】掘方底面に土を入れて平坦に整地し、その上に台座状に石を配置する。壁は底面から外彎しながら急角度で立ち上がる。

【埋設土器】底部の無い須恵器の大甕である。台座状の石組の上に配置している。甕の底辺レベルと同じ高さで、甕の中心に須恵器土器が正体で置かれる（写真図版 7）。甕の中の埋土は基盤層土と類似する。人為による充填か自然堆積なのかについては明確に判断できない。

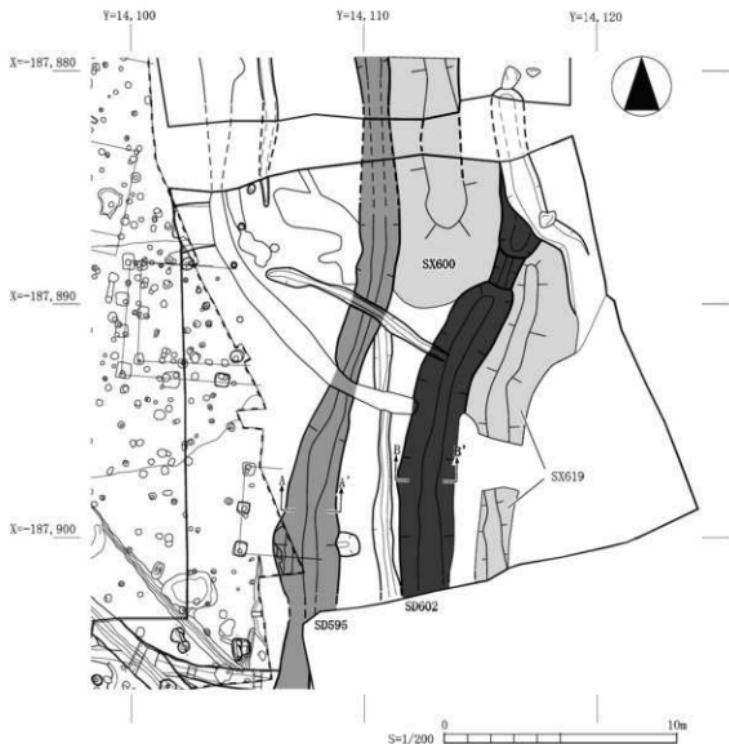
【埋土】基盤層土で、焼土粒を僅かに含む。

【遺物】埋設土器以外に土器杯（B V 類）、須恵器坏、須恵器甕が出土している。

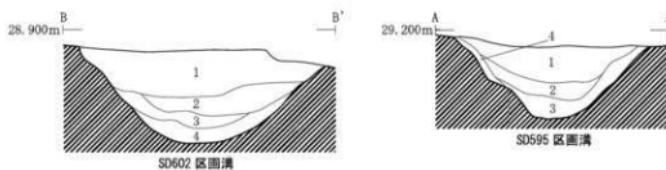


番号	種類	部位	特徴		口径 及 底 残 存 率	底径 及 底 残 存 率	器形 名	写真 図版 番号	備考
			外面	内面					
1	乳頭系土器 片	I部	ロクロナド 底部：細軸糸切り	ロクロナド	13.9 22/24	6.3 24/24	4.1	2-31	
3	須恵器 片	I部	口縁～瓶頸：波状文 側部：並行タテ糸	磨て具底	47.3 17/24	—	—	2-75	

第25図 S X 601 出土土器



第26図 東4調査区平面図



- 1 暗褐色粘質土。炭化物を僅かに含む。  
 2 褐色土。地山層の小ブロック ( $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ ) と炭化物を含む。  
 3 灰褐色粘質土。炭化物を含む。  
 4 灰褐色粘質土。炭化物を含み、底面に酸化鉄層である。
- 1 灰黄褐色粘質土。地山層のブロック ( $\phi 1 \sim 10\text{cm}$ ) と炭化物を多く含む。  
 2 黒褐色粘質土。炭化物を含む。  
 3 暗灰色粘質土。炭化物を僅かに含む。  
 4 黄褐色粘質土。表土の流れ込み。

第27図 東4調査区透構断面図

【東4調査区検出遺構】

S D 602 区画溝（第 26・27 図）

【位置】調査区中央部で検出した。

【重複】古代と推定される小溝と重複し、それよりも新しい。

【規模・方向】南北方向の溝である。北側は擾乱により失われ、南側は調査区外へ延びる。南区で確認した S D 604 の延長線上であることから、同一の区画溝と推測される。方向は北で約 15 度東に偏する。検出部の全長は 17 m、上端幅 2 ~ 2.5 m、下端幅 0.7 ~ 1 m、深さ約 1 m である。

【形・底面】溝の断面は碗状で、壁は底面から約 40 度の角度で立ち上がる。底面の標高は 27.7 m で、南北区検出の S D 604 区画溝とほぼ同じ標高値である。

【埋土】4 層に区分される。褐色・灰黄褐色土の自然堆積層である。

【遺物】須恵器壊、須恵器甕、平瓦、鉄滓が出土している。

S X 619 土壙（第 26 図）

【位置】調査区東部で検出した。

【重複】重複はない。

【規模・方向】南北方向の土壙である。南側は調査区外へ延びる。残存状況が悪く、基底部のみが僅かに残る。東側に S D 602 区画溝を伴う。方向は北で 8 度東に偏する。規模は南北 14 m 以上である。残存部分での基底幅は約 4 m、残存高は 15 ~ 20 cm である。

【積土】基盤層に類似する土で、均質な黄褐色の粘質土である。

【遺物】遺物の出土は無い。

【西調査区検出遺構】

S X 618 土壙（第 28・29 図）

【位置】調査区中央で確認した。

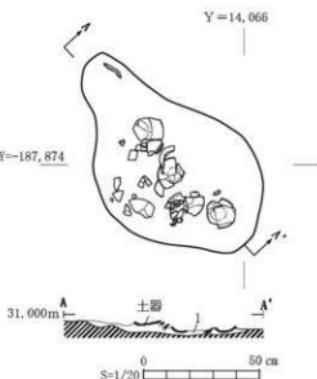
【重複】重複はない。

【平面形・規模】不整橢円形で直径 1.05 m、短径 70 cm、深さの円形で、深さは 10 cm である。

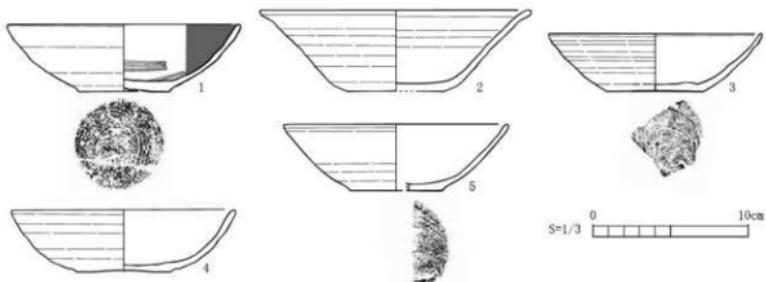
【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。

【埋土】黒褐色土で、基盤層土小粒（直径 5 mm）を含む。

【遺物】土師器（B V 類）、須恵器（V 類）、須恵系土器が出土している。



第 28 図 S X 618 土壙平面図・断面図



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 杯	1層	クロナデ 底部：回転糸切り	クロナデ ヘラミガキ—黒色起源	(14.8) 3/24	4.3 24/24	5.8	14-3	R-21	B V類
2	須恵器 杯	1層	底部：回転糸切り	クロナデ	(17.2) 8/24	(6.2) 11/24	9.2		R-22	V類
3	須恵器土器 杯	1層	クロナデ 底部：回転糸切り	クロナデ	(14.2) 2/24	(5.8) 11/24	4.3		R-23	
4	須恵器土器 杯	1層	クロナデ 底部：回転糸切り	クロナデ	(14.1) 8/24	6 24/24	6.0	14-4	R-22	
5	須恵器土器 杯	1層	クロナデ 底部：回転糸切り	クロナデ	(13.6) 6/24	(6.2) 8/24	3.7		R-24	

第29図 SK 618出土土器

### 3.まとめ

本調査では、古代の掘立柱建物、竪穴式住居、溝を、また、中世の遺構として区画溝を確認した。なかでも、S I 607 竪穴住居跡と中世の区画溝の残存状態は良好で、さまざまな資料が出土している。これらの資料からそれぞれの遺構の年代について概要を述べる。

#### S I 607 竪穴住居跡

S I 607 竪穴住居跡は南区東部で確認した建物である。遺構埋土は1～5層に区分され、いずれも黄灰色もしくは灰褐色土の自然堆積である。遺物は建物床面の直上に堆積する2b層に集中する。出土遺物は土師器杯（A・A II・B II・B II c・B V類）・甕（A類）・稜塊・高台付坏・須恵器杯（I a・I c・II a・II b・II c・III・V類）・高台付坏・稜塊・蓋・長頭瓶・灰釉陶器双耳瓶蓋・丸瓦・平瓦（II b類）、鉄滓である。特徴として、a）土師器杯は非ロクロのもの（A類）とロクロ調整のもの（B類）が共伴しているが、須恵器に比較すると量的には極めて少ない b）須恵器杯の底部切り離しでは、破片資料も含めると、I類3点、II類11点、III類29点、V類1点であり、再調整を施すI・II類とIII類で占められる。c）底部資料のうち、III類の占める割合が66%と非常に高いといった点が挙げられる。一方、杯類のうち図上で完形に復元できたものは29点あり、土師器杯が5点、須恵器杯が24点である。須恵器杯を底径／口径比別に分けると、0.45～0.50が2点、0.51～0.55が5点、0.56～0.60が6点、0.61～0.65が6点、0.70以上が1点である。

周辺遺跡で S I 607 出土土器と同様の傾向を示すものには、延暦 9 年 (790) ~ 延暦 24 年 (805) の間に位置づけられる市川橋遺跡 S X 1351 C 期がある。出土した土器には土師器、須恵器があり、土師器壺・甕では A・B 類が共存している。須恵器壺では、III 類が 91% と圧倒的多数を占めており、再調整を施す I・II 類や V 類の出土は極めて少ない。底径／口径比は 0.39 ~ 0.73 であり、口径に対して底径の広いものが多く認められる。

S I 607 出土土器は、須恵器壺 I・II 類の割合が高くなっている、S X 1531 C 期より古い要素が認められるものの、およそ 8 世紀末 ~ 9 世紀初頭の範疇に収まるものと捉えられる。

なお、4 層出土遺物には平瓦 II B 類や、折戸 80 号窓と類似する灰釉陶器双耳瓶蓋が含まれている。平瓦 II b 類が政府 III 期以降、灰釉陶器双耳瓶蓋が 8 世紀第 3 ~ 4 四半期頃であることから、年代的にも矛盾しない。

#### S K 616 土壙

東 2 調査区中央で確認した土壙である。接合できない土器片が多く、不要な土器を一括して投棄したものと推定される。復元可能な資料としては、土師器壺 B V 類 1 点、須恵系土器 2 点が出土した。底径／口径比をみると、土師器壺が 0.39、須恵系土器壺が 0.38、0.35 である。このうち、須恵系土器壺の口径／底径比をみると、灰白色火山灰降下直前に廃棄された高崎遺跡 S X 1080 第 4 層上面出土土器に近似している。10 世紀中頃以降に多く認められる須恵系土器小型壺が含まれないことを考慮すれば、10 世紀前葉頃の範疇に収まるものと考えられる。

#### S K 601 土器埋設遺構

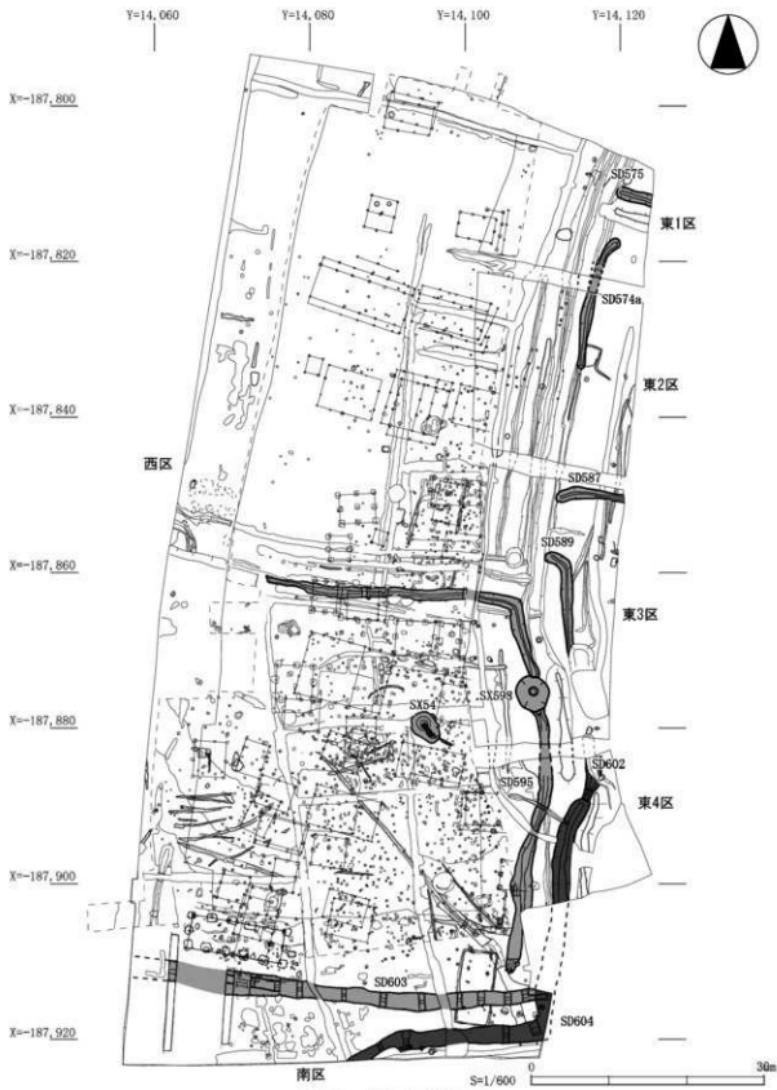
東 3 調査区中央で確認した遺構である。掘方の底を整地し、底部の無い須恵器の甕を台座状に配置した自然石の上に置く。甕の内側中央部には須恵系土器が置かれる。甕の口縁部は旧表土上に露出した状態で埋設される。底部を穿孔した須恵器甕を埋設する例は市川橋遺跡でも確認されるが、いずれも井戸の水溜としたものであり、本遺構は目的が異なると考えられる。10 世紀前葉に出現する須恵系土器が含まれることから、年代は 10 世紀前葉以降と推定される。

#### S K 618 土壙

西区の中央南寄りで確認した遺構である。掘方は非常に浅く、底地に不要な土器を一括して投棄したものと推定される。復元可能な資料としては、土師器壺 B V 類 1 点、須恵器壺 1 点、須恵系土器 3 点が出土した。底径／口径比をみると、土師器壺が 0.29、須恵器壺が 0.36、須恵系土器壺が 0.40 ~ 0.45 である。このうち須恵系土器をみると、上述した S K 616 よりも底径が若干大きい。10 世紀中葉以降に多く認められる須恵系土器小型壺が含まれないことを考慮し、S K 616 と同時期かやや古い 10 世紀前葉頃の年代と捉えておきたい。

#### 中世の区画溝

南区の S D 603 区画溝から、瓦質土器擂鉢と施釉陶器平碗が出土している。瓦質土器擂鉢は 15 世紀後葉以降のものであり、施釉陶器平碗は古瀬戸後期様式 III 期のものである。また、同時期の区画溝と考えられる S D 595 からは、明代 (1368 ~ 1644) の青花碗が出土しており、これに接続する S X 598 水溜施設からは無釉陶器擂鉢、茶臼とともに天目茶碗が出土している。このうち、天目茶碗は古瀬戸後期様式 III 期に分類され、15 世紀中葉頃のものである。青花碗の年代がやや新しい可能性もあるが、S D 603・595 および S X 598 の年代については、およそ 15 世紀中葉以降と捉えることができる。



第30図 中世区画溝位置図

これより新しいSD 602・604区画溝跡については、重複関係でSD 603よりあたらしいことが明らかである。年代が推測できるような資料は出土していないものの、ここでは中世の範疇に収まると考えておきたい。

ところで、区画溝全体を見ると、SD 595とSD 603は同時期のものであり、規模や傾きから一連の区画施設であると理解できる（第30図）。また、SD 602・604については、位置関係からSD 603を踏襲した新しい段階の区画溝であると考えられる。このことから、本地区南東部においては、中世のある時期に丘陵部の使用空間を拡張する目的で、区画溝を外側に掘り直したと推測される。

これらの区画溝によってつぐられる区画を見ると、SD 595と南北方向のSD 574を境に、丘陵部が南側約50×50m、北側の約55×50mの2区画に分けられることが分かる。さらに、SD 587・586が調査区外東側へ延びることから、調査区外東側にも少なくとも2区画が存在すると推定される。

また、南区画に造構が集中する状況を見ると、南区画が継続的に土地利用されたことは明らかで、それに比較すると北区画の利用頻度は低いと考えられる。南区画がある時期に拡張されることを考慮すると、南区画の拡張を期に北区画が土地利用されなくなった可能性も考えられる。

#### 【引用・参考文研】

- (1) 宮城県教育委員会『多賀城跡 政府跡 本文編』 1982
- (2) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1－西沢遺跡第2次調査の報報－』多賀城市文化財調査報告書第134集 2017
- (3) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- (4) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第11次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第37集
- (5) 太宰府市教育委員会『太宰府糸坊跡XV－陶磁器分類編－』 2000
- (6) 藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』 2008
- (7) 日進町教育委員会『折戸80号窯発掘調査報告書』 1978

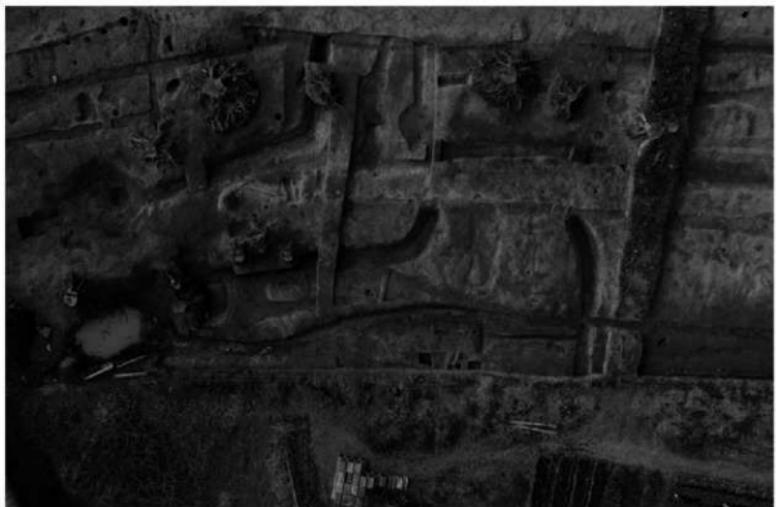


調査区と多賀城跡（東から）



調査区全景（上が東）

写真図版 1



西3区全景（上が西）



東区全景（南から）

写真図版 2

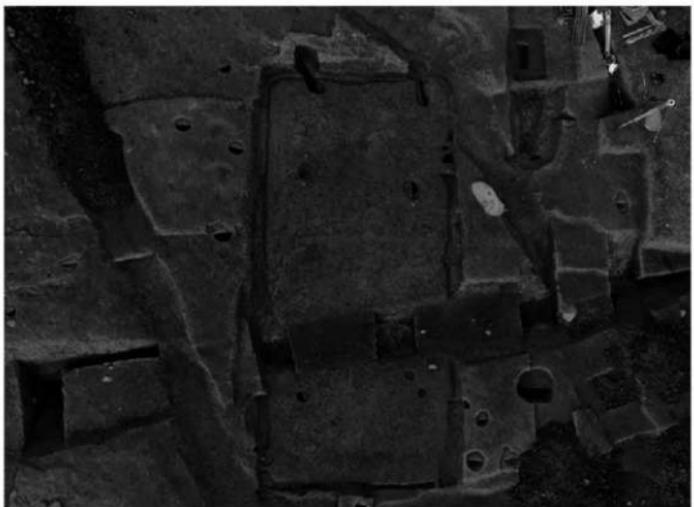


南区全景（上が北）



南区全景（西から）

写真図版 3



S I 607竪穴住居跡（上が北）

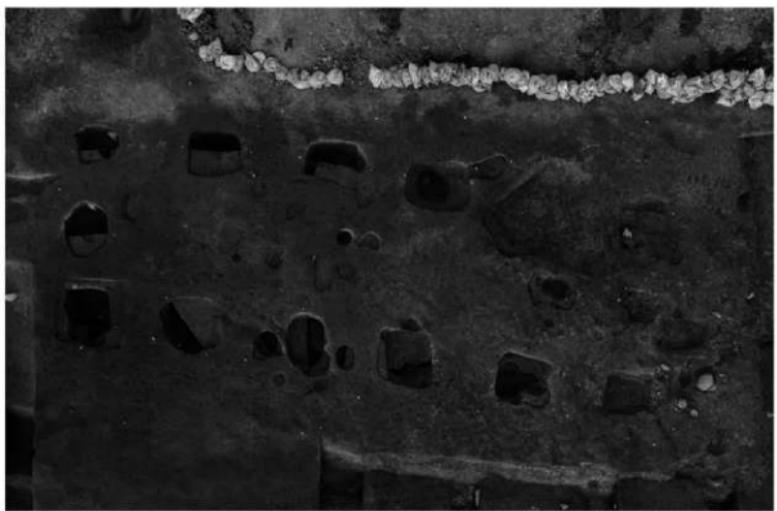


S I 607竪穴住居跡（南から）

写真図版 4



S I 607竪穴住居跡遺物出土状況（北西から）



S B 608掘立柱建物跡（上が北）

写真図版 5



S X601土器埋設遺構 検出状況（南から）



S X601土器埋設遺構 半裁状況（南から）

写真図版 6



S X601土器埋設遺構 須恵系土器片出土状況（北から）



S K616土壤 土器出土状況（東から）

写真図版7



S K618土壤 土器出土状況（上から）



S X576土壠とS D575区画溝（北西から）

写真図版 8



S D 595溝跡 断面（南から）



S D 602溝跡 断面（南から）

写真図版 9



SD 603溝跡 断面（東から）



SD 604溝跡 断面（東から）

写真図版10



1 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R36)



2 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R37)



3 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R38)



4 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R39)



5 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R40)



6 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R41)



7 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R42)



8 S I 607竪穴住居跡出土 須恵器坏 (R44)

写真図版11



1 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R47)



2 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R49)



3 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R51)



4 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R52)



5 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R53)



6 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R54)



7 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R55)



8 S I 607堅穴住居跡出土 須恵器坏 (R56)

写真図版12



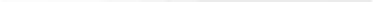
1 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器蓋 (R61)



2 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器蓋 (R62)



3 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器蓋 (R63)



4 S 1 607堅穴住居跡出土 灰釉陶器蓋 (R69)



5 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器壺 (R67)



6 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器長頸瓶 (R68)



1 S 1 607堅穴住居跡出土 壺・蓋類



2 S 1 607堅穴住居跡出土 須恵器壺・長頸瓶



3 SK618土壤出土 土師器壺 (R21)



4 SK618土壤出土 須恵系土器壺 (R22)



5 SK616土壤出土 土師器壺 (R81)

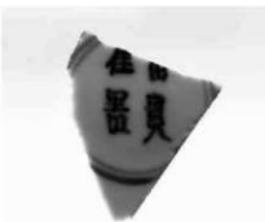


6 SK616土壤出土 須恵系土器壺 (R82)

写真図版14



1 S X601土器埋設遺構出土 須恵系土器坏 (R31)



2 S D595区画溝跡出土 青花碗 (R49)



3 S X598水溜遺構出土 茶臼 (下臼) (R2)



4 S X598水溜遺構出土 茶臼 (下臼) (R3)



5 S X598水溜遺構出土 天目茶碗 (R1)



6 S X598水溜遺構出土 天目茶碗 (R1)



7 S X598水溜遺構出土 無釉陶器擂鉢 (R18)

写真図版15

## 報告書抄録

---

多賀城市文化財調査報告書第 139 集

**西沢遺跡ほか**

山王遺跡第 181 次調査

山王遺跡第 186 次調査

西沢遺跡第 30 次調査

平成 30 年 3 月 27 日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目 27 番 1 号  
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目 1 番 1 号  
電話 (022) 368-1141

印刷 凸版印刷株式会社  
仙台市泉区明通三丁目 30 番  
電話 (022) 377-5211

---